假名類句和歌集　上

假名類句倭歌集

へ4
1179
1175

假名句題倭謌抄

序例

敷嶋乃やまとうたハ神代のむかし久ゟ始まり
すさのをのみことよりわかおこりて文字の数定まれ
れとハちからうねのつちにしをいつも尻へのきさ
はしまり世芦原乃国のみやこ とさなりてこ乃
みちさかりになりけるまても花鳥風月につけ
歌してこゝろさしれゆくところを言葉にいひ
あるところにあらハれいにしへよし寧楽のみかとの
御代に萬葉集を撰ハれてたくさく乃歌を記せる

明治三十九年一月二十九日 水谷弓彦 寄贈

なくともいにしへの時のはじめくさをわかつことも醍醐
の天皇の古今集より郭公を定めさまの物名の
ことは常の本意をはなれて物の名によりてよむまて歌
して其名をかくしよむことを志しゆへしれ
これは人のる家集に六十余の虫の名をかくして詠せ
られやそもしめたる神号を歌することは大江千古
か詠まるゝ人物を歌し経文を歌もろることは後拾
遺集にみえ句詩の句題は大江千里か詠をはじめ
として百首によまれしは京極黄門を撰藻とや申
一まき称和歌の句題といふ事は技黄門建久の比秋

右大将家にて萩の上風とつゆわけ暁の雲といふ事をもて
末の一句を十二のきざみにして詠ぜられしやそれならん
是に続て吉水和尚壬生二位古今集の一句を題して
詠ぜられしかばそれより連綿して後柏原院の比より
三代集の句題をもて四季恋雑に組てよむことと
なりにけり又假名題を古今六帖にみえたる歌の文
字を一字づつ神の句の上におくことあり是も
建久のころにや京極黄門あさきゆめみしといふかみは
じめて四季恋雑の百首を詠ぜらるゝとも也此
たゞ歌の物とよまれしことはことばのゝちの世の乃ミ

つらねまつりぬるの物を一らしくまとまれり例ハ古
為和尚詰籍たりしよりたえしめて文明のころより
さかりにもてあそばれて浜の真砂のごとく
なりぬれば倭の切字を神なの句法上のなきこと
も京極黄門の流せられしより世にひろまりしとぞ
夢想の和哥にも切字をもちらるゝこととなりぬ志
こゝろよ仮名数百数のうち代々の勅撰に流せし歌
ハ初学の人々のおもむきを志らしとこゝ西屋よハこの
各目を志るし人々これかりよて此道ハよのなけ求学
同志の人をしてせしめんとてはかりの関の人めとこの
屋かきのうの墨の露の色を志らめく和哥此
うらの玉藻をとりあつめ川ながれ奏しと称しぬおそらく
くハてまへのあり〳〵や待らん文歌するこの傳る
ことハ字なきのかくにちはしたてる全本をつんしる
ものたすらん人ハこれを補ひあきむてんかし

享保四年仲春良辰　洛北散人勝翁謹誌

假名題和歌抄上

拾遺愚草員外雜哥上

春

わかなつみ　ひめのまつ

たまゆすき　かきつくる

あらたまの年をてとせうらねふや霞もまとひたちそめらん

さよの夜は清るなかくし月影のくもりともそぬれきさかれ

かたら山てるにひかりに霞きてゆるそ春とや川はなけり

すみそめにつゆとなましぬかすかつらしやくゆうらひその夢

こやまちや苑は雲のよそにくらくなかぞらひ春乃夜の鄕

ひの杉は杉見えし霞ておもひつつ秋の春にとかりくける鄕

めやけき太きや人のあつさら春の中に見れ出とたつる

めきさにそまらおもけはみてみかつらぬめ夢も梅の匂ひさ

ちるの霞れはまの月の月影におやろけりにかかにも志ひるる

なかくへん春をやとおりふもはなまろへさえのうけかへ

それすゝて心のかきりはなくてん花よりはなの春の山さへ
帰らしに花に風のさそはれ行わか跡を袖にまかへる
せみかなきおりてつらん州の辺すみてれぬる山の花の一きさ
なきのよもいつ春の霞のうらみれはさらにひとりそ先にかせける
きりのゆやゆふのさへ乃清風と来ぬのゝけしくなりぬつくし
うつる盾きれつゝ余のきえはと立ひかれすは多しうしや
ことのはすてゝかくしむゝ霜もそけきはわらしの玉沖の文
待くしはくらはの西行法師の人目もけとかていつら近人
ちかりてはふるのとおもふかいはにくき人は春乃あはれの
たちこゝろ春のゆふのけしきにうらみ見る乃も草とよるらむ

夏

かしこきれとこゝろ川
ちるかきちらちらす

かもろくころもの月られめつりわひて又たちきてある志ゞりうるゝみゆる

ともかくしかきりの雲氷またなかりき夜をまへ人のはなくるの卯花
とりあへてすくみ月数の所にもすくに又し小田のさはゝえへらえ
これにまつきけると座の隅とおはに山の松ものかほやこゝすゝん
すみれをりや君かはなのまにくれてなるそけるを松の本のめのと
ふかゝひさらにさてりいみえて所に見えしはの上のみつりまかれゆき
おもしろく住みよて夜やの時みてひ涼しくさけるタの水の露
なかゝのをあれそよくつ木の下すゝちさすてゝつよむかの涼人
月まつ宿をいるとて旅ものかへつる室さやかるはに夜のよはの光
くる名よく合は見るおもひゆくえかりはゆし夜むしの声と
夜の雲はられおかるさの雨にとおし出のはたに月はやとうりて
たつる山つゞきおらぬる夜あけもおりひそめてし欠けぬる風
おりしとも夜のそしきのこゝろあられそるとやるる山のくれの月
ちらの深さくわたりの風もうかりおひて山のかとすゝしはかるかな

なにはすくおまでも月ゆふも袖あかれ程の夜なくれかな

秋　とこまへし　ちのすゝき
さゝ竹　とりみち

なき里のこゝろにておもひ露も秋風にて心がなり
みちしるべやうちきさする虫の声すてもいづくむすぶへ秋よりあそん
なる月のまどの月ねわすれまてもなにとぞ伴しおもひのきも
色さつらんいくへの色も紅葉もよして枯尾花にてとまるのきくらん
しらぐ露のおくてまはゆきくらそよきさびしく秋の風よりおほひさ
鹿のこゑあはれなり風もそよ吹きて秋のあはれは出ちるさと鹿
沖へ八重萩の下露ねさみてた風よりなりつゝ秋乃夕くれ
すかゝりの秋つげる雁すむへくわりはるれとも紅はなかりも
まてれもいにしへのやよふくさ秋ちる桜の月のとの夜は
きりぎりすて虫の音にたえつゝぬ夜はなる月のすゑとうたへる

ふさひくわひさんとよくそのひゞけ出てかゝるしき秋の夜長の名月
ちりにそゝ清きさの萩のち風して露あまりうへ月をさかる
はしめなき月のゆくゑにあわをへて清き心のたえそ絶えてかしや
かくやのちゝるさらかのさかりも秋としいふへて袖まで流ね
もろ風の色をさたころよりみまらねたへてもろくそ流るれ
ちし露やかゝし尾花ちらんよい葉で虫の枕も花のいろく
しもうらひ尾花のしでさのぬれ清まり女郎花とき花のむらさき
そのおとそてせうし袖もなかり桐の下秋乃いらぬ
見ずは世ハよものこずゑにみ落して秋とうきりの山おろしの風
あきりつしかるさもかりそ定まるあり秋のまれに

冬　さるゆき　とよすゝき雨
うつゝ火

それくあるちへちしくれの色ろうち雨ふ雪葉もおもしとうし

ほそにふく人のかへし袖子月にかちよとつまの戸ほしと
菊さくほまさむ世をほけ秘かしもけさめねしくれわけ色
きくほそくかく秋の原く雪ちりてさらはしほわすりかゝる
さしのうら氷のひさしに風ほしてくものそと絵まつへくさる
のこりけくられぬる雪の戸わかまつ葉くのうぬるのまよるふ
わらの香はしもふしわみも色ほしころ冬の月はよあかく
すゝりやみしきの五をわしかりていくその谷は雪つりるん
こかと人のわまれ氷けさちてさつりはりほみちもうそ深
風さみくるかの比ほ原雪かりてたくそたしめともあしぬる
まさみさまるの雪もわさきりて雲ほく人あさきをのこみ
うさ稀きそかものよ毛まうる雪をとかさるさ松ましうらふ
ほ世つのゝつのさうひとけぬすにかまう首みのうけ代
こか人の去をむかめるんしそ年のくれわるなしきなりふれ

目も言ぬたしハかてとかさらふくわかれを世にあかりの中へ

哀 おもうけふ こひそひて
うらも秘そ

おかるまさてや座まん人妻にさのひちさり妹れも秘ハ
との我も袖のよそめハ志かくともほそとかれわ君まほさへむ
かくみえたよそあうそれとそておかしやも水のあまたく
ほかハ文わりしよりけを秘をそあくうれさまその面影
みかの衆ハほうよりのへそあるれ桶さく悪と人やうそのめし
こゝそともなくてほかれ夜その月さ人わか袖に添りて
秘し出ねあさるのそこれかく間りうれあて酒 ようもあれ
これかつさ我ハみもわかしん花わくれむくひ我とも川ま
むさしらもわかそて色へさ月ろとかけても志て深くあなの海し
身ふむすあかくにかうね山の井のかけうれゆく袖代そま

うはのそらとなりぬこゝろむしろしぐれもしらぬよとこの山路
ありつゝるのこしもしらぬ袖になてかくいりくさる衣あゆむ
こゝろもにゝ有明とかゝらふく風のゆき来 行とま
旅よたくねぶりもえし秋のもなきならぬ宿のはしに
すゑの露やかたねぶるおけてなるときすてかの波のたちくそば

雑 わかつきハ 浅日なし
おりそとと

いかにかりきててわる山ろうへきこぎひとつかけにく
このすまゆりかのそうりさえてわされと神も浦の夕風
はらえそてしけるよ浮のむつ河雨にひゆく袖よ袖浅りかり
君が代はおもひなし川袖はれともひもおかひ山のかへらね
かなゆのやさあらかおいくもいさしおさのまこほおりき
つりゆやはしまかはそむかへをとのそてもこねこの絶えに

ゆきこそのはぬうすゝきし人のうちこそ香ととのはしくうく
みつる数よりそくかりの露けさに花みまちての花なれかけりかり
かりしのゝ宮にいふも秘密にしのびれすたりけりつるふく
志みもりし流との松しめやかけてゆく深の野らくとまるされ
おもひ母の露のハ千代とこ笠をさるの末ゑの志へたりぬ
なごしきやての月の中へよ敷もの宿るかな神もくらしらん
うゝきわくところつゝ宮のわたる夕いつきのやにしも浦し
仰てけるものゆきこのめもつるのすそとき野やつる
年をへてんのそらにそれともわされてまるこそ○みちをまか

賦百字百首 拾玉集第二 一時中孫くく

春 二十首

わさらはるん

わかみどり春は霞にわか紫の雲居はるかにたちこめしめぐれ
ゆたかなる春をむかへてとしもかはらぬ景色のあさ
かすみしく春の野原の夕かげにあそぶ雉子のこゑ
すみわたる川辺のゆふべなかめにはうぐひすもなく聲もして
こほりとけし谷の戸あけて春のこゑ初音の今朝はまづ

むめ初音

むつましき春のくれ梅かゝるたびの山さと
めづらしく枝ごとにさける春の衣ばかりけさのにほひ
の花の梅の匂ひを袖にとめて都より来る人をまつ
さるのもとにそへし風にや梅の匂ひはちらし
かへるさを思ひ梅にうつりし人まつむかしのかほりなり

たまやなぎ

青柳の川柳のなびきとりかは水のながれにやなぎなりけり

沈てさびしくかたる人を青柳のいとによりてさびしくめん
山さとのきしの岸の青柳はその春しもなりぬべきなれ
なかなかにしなびくなびくそむすびたれ柳のいとによりてかる
きみが世のためしにむすぶ青柳の糸はいつまでの春のなへき

かきつばた

うつりゆくこの池にはみなかきつばたすみよしや水のさかん
まぎれたるはかなきは春のそれぞれにも散りぬべき林の水
池の水やの池のかきつばた咲しそめし花のさくらも
うすむらさき池のみなもかきつばた咲そめて人やまたん
たちまちにわかみどりのかきつばた花もさくらやなかれ

夏十首

かへしきくに

あをやぎの春のいろもみどりは深くしげる夏のあさの若葉の露

とりかしらきれめこそ郭公ひとつさへ山へつきとて
さればも竹は色をすまんにてそれより力なりてきたる鶯なる
き人のわかねことは似にるを尻はけり氏めりたて気りける
すきめりたて一てふのきりまてわかねむなる山形くさん

とこなつ

とぶれと気もつてねとこ家の匂ひとりのそれより発れ
出須すそいそわれてなりわ中き句子ぞこの露おなけする
なへてすねりのとそこれ発句にゆらくらめとこ夜の花
露をけさらこそそろとこすつのかはひりとそつの生て

これみそしちる

ころもそ梅にさくとも花の方をてらうすおやさりせん
なへてつ風をわりへいたらこなの梢の下の句ひありかかり
たくひうくわかれ文をつる句ひかまむりしとこの茶摘のさむ

ちりぬきとむかしとちのつみ竹ほわれいきとが秋を梅
こうおしやさるより落ちつ世はこまてらいまの句ひかりなり
うふのほおりやまとにそ狂も花さえられの物と句つる

秋二十首

とみおへし

わりちてあらりし露と世露もけく手とあつりまつこさたと
こらへ人を知るし四ツおなその八朔へ子為角めく世露の花のか
何ゆかず露らわらんめ露も己ものおのいのまでくまうん
露まそりのすそその林はそうてへし字深きしやうりてそ
赤のき河水むせて面も世露花ゆまより露かはそのうわれつ

これすすき

ころくとおの米をとりて花すすきと油ぬ人をまのきの露風
なくしのこふりず滴りと小荷のすのさとえてつ然いかかすり

すりぬりの夕ハされはわかれに尾花のすゑも風とはりせて
きゝそねハ尾花のうつろひたるさまも浦のほとり
まつりてうらもかはりなすりのまへのあはれつくすらん

ふゆのはしめの雨

あはれまつりそてをふりて雨ねかきくもりかはらす
うらりてしとはあきの紅葉のかはりけるもすゑはくなりさ
秋の夕ハちくさあれともしきしの夕のゆりのいろなきもみち
くそてまつりてしとあきの秋の初にはかなれとちりて
まつの月さえわたりしらてゆるあまの打のはしるかけ

ちしりみち

ちるさはゆ色はあきつきのつまとてもよりてなく秋も紅葉
しつしめやうのあるらしの紅葉この空ちりもすゝき花ひと
わかるしにあきのよあはれ身ハしやに深き未練くちりかな

こひはるを淵をもこえてにめくりけりハ秋のひしにかしりけり
ちるらしハ菊の花すゝもかけしひすまされとあはれハなかく行り

冬十首

はつゆき

ちれくりる淵雨の有明の夜月をあはれハやみてほそくの初雪
はるの紅の林のをとこの小萩に月もいさよふなき山にくらり
初雪ふりてなみなみつもりのはつかすかりやまのハかすみもつれの空のかけ
さびしきてそおつる木の葉とおもりいつもけさ見るはなまちかてん

おちはする雨

木のはハ雨きハ冬のきひしけれ初ハ初めの冬の時雨
のきちかく嶺とをる月すの雨とけりのさえて大原の里
ほのぼの冬の谷ふきのよハしくおもひしりくもるの梢の霰の雨
すみそめのすみつゝ月にあはれもてさむく見るよのせは

見んとこそ世にあれ人の宿ひとつにや宿す身の程なりけん
わかこゝろ深きそらに月見や広くすゝ海の底に入りなん
海き沈けき深山の月は松の海に身もそ見る岩に心く

うつし火

うしと見え思ひ知るゝ夜の月にそのひとつ影は消へぬ火
ほのかにゆきてせさらんうつしひの中に影せさりけり
君のおもひ人は思ひと物思ふ人の中にも一つといふ程すまし秋
人しるや夜のうきを火かりてすみし思ひの月のかてら給

恋十五首

おもひけり

おもひといひそ忍せんすることてその月も新しいかれ秋に
中の空人の面影に忍ひくやうにほともいりなんとなん
恋くもり身の心の色わかれは我かり陰もやらん

きみにては折り新しくもなくうきよの底の世にて心ろ乃しりかな
おもひ知とむすふ契りはならぬれと枕の面影かよふなりけり

こひもひく

あさ世にハあはれとも恋しとひてうひすきやそや枕おきけん
人の世にかゝるさき物かはるれや恋すてる身のゆ末なりけり
けしの山ほのむしろにうきうん恋しる身のむしひいつゆやそ
むさら人をうひそうら恋しひてあはる枝の夕おもひさハ
てる月をおもれさいのまゝにつらん涙くもりて恋しかる月を

うらみも頼そ

うつろひし人の心のつれなさとこそ頼み枝の契りつゝりあるそ
ちくふ恋をこの命のそをけりて頼めよの床まちとしくれ
かのふかうちも頼みてやおもひてん恋する夜その床もわるゝ世に
頼めよ人の契りハいくそつゆりあるかたへてかさんよ恋しのかたき

するまことおもふ心よりて心のれなりすくまつるなんの玉つさし

雑十五首

おほつきは

秋の月を恋ふ涙に慕ひの物のおもひ心なきおもひかけぬ

このきの秋は心とおもふかゆくやりきしつらん

つきもせすおもひてくれのなくともひとつこゝろの人の

まく人の心をつくりのやうにおもふにけふかはつかきのつきは

あり染めやすき涙のうちに恋の月の影をそれは入りける

はかなし

つきの秋をたとへてきける哥なりかくいひけるに恋しと月をみる

ゆかれはあさらの末をそく哥の風まかせとおもひありつて

ふきすくる風をやおもひとゆくんなのくもなりけりはつ

このいつよりこゝろの世とはありかし秋の哥にあるらん

あらぬ人ハよもかくしうしろそくもいふらなれ哥の心なりとかれ

たりとて

おりてとかうとさん人のわかいときにやうにいひおもひさん

とりかはいかてこの世のうきころめそつるの心ひとつ恨とうへき

ふるにいつもいつもてありりふうき世の中にあらしと思ひしん

あの人の都あはるのをそれをねんとてありいありてよふく

ところかくさせそつきもせぬ佛求淨土と歎雜様なとを

勧白百首此一巻ハ定め羽林結構也同年同月同日

翌日一時半之間詠之自巳半至午四點也

拾遺愚草下

建久七年乃秋内大臣殿にて文字をかみにおきて

廿首詠の中に秋十首をよみ侍りし　ゆふちそ侍

定家

をちかたやたまえの雲おちて一夜ふたよに秋風ぞふく
こゑのみぞふく風にこたふるやまのはちすの葉のそよぐ秋をきかしゆる
なくせみも秋のはてきけば鹿よ山の高根のきりたち染
暮てゆく音も日数に添ふれば虫の声さへうつりやとこと
たまさかの人の枕をすまてすむ月のかげもうつりあへず新
うゐにかり来てかれし月をみてこのやそのさすらし
ちりぬれはかし さそりのと秋霧の乃にぬさうりととりてとふし
をやせ川瀬ははやれゆく波のさ浦ゑぬ秋と何わけしむらん
かりがねの雲ゆくをまそく霜の手もさ夜にわすれさへ帰る
まつ山のわさの秋に秋くれていつかはかさん露にまされも

同七年内大臣家にて文字をかみにをきて廿首

寄ことし中秋 ひのうち

たえの水岸の河芝をあへくれてゆくへの松に秋風

日数ゆく山とあとのなかめにも暮る秋をかくる月かけ
行きたおつる音もかれそし庭の月あれゆく風やかくしそらん
こやとこそ宿のたちかは悲人とも山のしくへと暮てそきぬらん
ちきりおきこれをみ給の月はひるかなくさむ夢もねてらしとれ

建久二年六月日あくつまし夜ぬくる卯より大将殿
よりいろ日の内中七首と給りして内侍につかはせる
つかまつりしよゑやそてさつけ侍し

詠百十七首和哥

権少将

春 十首

いつしかもすめる空かなきてきて夜のほとあまやのゆふの
あふの上の秋は霞八月のほと暮ぬる里は日くらしの空

春きても谷の氷ハうちとけもさへ出ひよく鳥の羽もうるか
みわひさね海ミのやよひは桜の色人めぐらしは花乃めぐれ
かのくもほかるよ山の子のつき声ハさをの鼓そうもせる
色そふや藤乃白ひと見えて花ちりまじる春の山さと
夏ちかきみどりの松乃つしかゝる藤の中なりひなかな月
ちり海よふ花まふ山梢たかうりを有けぬきもなぞひとへん
アよりうんの路よりこし雲はかる雨よ海ひてちるちるくるか
めきさへひわをの秋の夕かのしいくる人あれし花のまかへし

夏十首

ゐりの露よ夜はうへくてあり山のみどりをとうつも波かな
その山やまもみそこりる雲とかんそ卯むまるるたよ花かかれ
ゆすられねてその吉よ尽しひくてすよあつし手花とあ淵
かさしりてよみえとくるわさひ春は照月のかけまいくとおかれん

よせかへる波のひゞきに秋たけて夜はすゞしくね夜のまの川風
なのひぐれちるもみぢの影よちらまりみて消へん枝のもの露をと
まいよりもこえひ涼しきかげしるき松の?の山の井乃水
神かきの榊の葉ごろもかれくて秋の初風ちるそれ花かへ
ゆりけり夜の月すとやとひつぐさくとしのほすさかる
稲ねまれとおもしろかのそゝぎさもたなゝかかへつきて月の暑

秋十首

なほまをくのそゝれしき秋風の音ありそむる庭の萩かな
らいまゝひさて秋萩のつゆとても紅の色もむすびそさく
むらさきの藤よ白ぐる花よりて夕ぐれ平しきをとまへしるか
うつろひゆく浪乃糸の露をけて袖よそくる秋乃夕ぐれ
おもやまの山なす下もいろつきてあくれまこを御くる秋かな
のちよ海さ雅さをとこんすは河やむすみて流くよ紅葉ちるらむ

おりとにわかれりよわに虫のなく秋のすゑこそ風の音かな
くれはおもひかへすもかなしきに秋のすゑはねなの有明の月
やさしたる秋のいりあひの精かなしきひとよくもる寒風
みかさしの社もさりのころさむけきのよそにしくれかかわ

冬十首

けふりたえぬを川しとわかの伴わかかこすゑわたる風の音を
冬さむかとつきの雨くちれ下ゆきてみちをゆくさへさびしき袖
こらのきこのはかれわたるなんなへてのこさそくさへ神宮
こゑのそなことはのあともみちふてまきのかけるる神無月かれ
あしくも宵よくとこうさのをこにふとしも今のまつきさへ庭
わとれておらずあさ一声ありぬ雁かへりかとまつ人のかし
さゆ河のせてい置すき冬しそ氷かけるにはよみるうる子
きみゆくかりその春日かり枝せんとみつゝ松ち声きあせ

霜ふかき松のひまよりおもしろくて山の端ちかくかつさや有らか
めくりわかれかれにはしきたかゐけふも名もそのくとせむと花のまか

恋七首

あくるまのゆふぐれさびしきぬくろうれしさのもう袖すらしを
あさかほの露にいはてもしかみすきてもる月のしかこも河水
あまりけるゆふもしれてかかるよとすきの君かなかなれは
ひさしくてかりりけりかかそれで契りし後の世のりかさん
りかのよきりなかきのたのあけりて誰そとかく袖いくさん
世のてはてひとをかてひのおもてゆいけるんけやちさりかくさ
すそゆるふきとすゝるわすかみのあかへいつまさきさすりを

假名題和歌抄中

清瀧法楽之内　永享十一年十二月廿一日

中納言雅世

ひめゆりを

ひとしへや今とふりてひめゆりの白らにけのおほ川きし風

やとる川

とりし火をつゝみのはかりの火もあれと程てり消する床夏のかも

とまるへし

かゝめりその影乃野を母子のきわまるるかゝれて読ひすてん

うらうらの

吹風にみちし宮路にうつりてかとろひやすき霞たちぬるか

ゆふ川雪

夕つく日さすや岩へにまよふわく知らぬ川し松のひとえ

おもひけれは
ねてもおもひおもふ極楽ねかひおもひけるに西方をこそたとらんとおもへは
うらみと詠そ
ちりの世やはかなきものそかしおもふ極楽もおもひもなきよりいつる
わかつきは
誰のとふらひもねかふの暗は夕つかるもかくしておもふ
おもひしと
あこよにのをたのは君のくもりし思ひしつかさ詠やうらん
年月不知
とかきくへし
みなとわれはよにさかりの時のまそおもひけるにひくきた尊信
うしろみら
はかなきかなよのなかのありさまたるひと秋風そよく

とのすゑの雨
月かけにさそひく絵なきへ云ふなりけれともあすての雨
おもひけれは
みなもとへ人の世のおもひけるむかし軽そゐはいかにとちかふさき
うらみと詠そ
詠くて心わかしつまうらを詠も露にかゝるおもひ
いはなし
おのかうかしのかゝるのつ紫露たしいかはそのみの庵にて候かん
たゝ書に続せよとのことにて候へと
文明十三年七月十八日御会　詠者　雅康
とかきへし
一位局
とくおもひとゝれは秋風のつらよりはかなむかし

御製 後土御門院

これハ又千草の中にとゝめえしなれもしらくてかへり

義尚 将軍家

ぬやこむ人のあはれのうちの花にさくとまし神もおなしハ

為冨 冷泉

夜もそよくさゝのはうきのおもかけもみえすなきさぬるらん

義尚

志ろの小家の軒にかうしとむすひさうに女郎花かな

これすゝき

勝仁 親王

をき萩すゝれさく袖の花薄をとゝまりて袖もなつかし

邦高 伏見殿

なかめくる志つけさの花すゝき露もおもかけ風にさそはれ

冬良 一条

末とほり先見てなかめ咲中ゝにをみなへしことはりの戀

道興 聖護院宮

すゝ萩の中にまかれし花薄をれる袖子も露のおきそへる

勾當内侍

ふきそよく人もなしとや風すさましきまゝの袖の露におもふらん

ふくかせ

禅空

ふけゆけハをみなへしまさる露の袖むすふ夜半の月も白露の人のかけ

済運 大僧正

ちりかゝる露さへ夕の萩の花のかくやとなかめしをふきやあはれさん

政資

さらぬたに秋の夕暮のいとせめてかるゝ萩の葉のうへの露のあはれに

為廣

風ふきて露とともにや萩の葉のうへにをきとめてこそあはれなれ

ねよりはしらはけつる庭ならぬ秋まてかよひなれしそこる
ちとりなき　信量

ちれくりの志てゆくもやらしお紫ちくうすき秋の人うち　旧院上臈

志られゆくとら枝もさひしけしお紫のうき思への秋お風　寳澄

をとのみをるも秋を露ハ宿て思ふさひしき夕月影うる　茶雅

ゝ山あやさひしき秋の雨影にふ露うふきお紫に　公朽

道永

ちりしくもまとなきすまうしお紫によ付るの浮しすらて
おりの宿に　持通

おきわかれ人ハ汚なおりけよむかしこて今ハたゝるすき　高應

りとらせハ君の元絆のおりの影よ露ほしてく秋もくまん　竞流

かよいゆく人おとすさへのおりのまれ汚らいのかたけりたん　雅康

をさつうおいなかつとなかりつけよむかしやうの契あるしも　親長

にほひくれ移りまさく人とまて雨ハ枝おり影く露てまれた
こひしまひ　勝仁

おりすまれ文の世のまてひねけりよて人のとらねとのゆく
今よりわかりたのまてつまならハ恵てひぬ九志ゝすゝ玉久ん　祥空

いりすくもまつせてかゝる玉簾はつ秋の音そ吹とほすと　爲廣 冷泉

つゆにほすそてのたもとにふけて寝覚とひやゝかにかゝりやまし　基綱 姉小路

わけても滝もかすむ折雅の尽すまてまきやかに湧きまさし　増運

うらも霧そて　御製

ほしとくまつ袖もおきそてうらも霧もいく夜のこゝろてもかはらぬらん　義尚

ふかきよりは霧をかくやうらも霧をひとりおきかた床のさひしさ　信量

から衣とまつ心のうちも霧をかける袖さへもせくまさるらむ　榮雅

霧晴ぬよ今いくへかとこゝろの秋風は吹も尋ねておきわて　爲廣

すそ野ておりふしのうらも霧も露も見えはなくなるまし
わくつきは　親長

わきかねとうれさてしほるゝ袖かさねて縫かさき晴れやらし　一位局

うちくもる空の霧さね晴れやらぬその日中にてもうちちらして　道永

月影の霧そよそらさき晴れやらぬみかけはすゝやかにもなくらん　爲應

こきにほくを木かけのうちは暁は消てかゝる山風のこゑ　邦高

たちすくも朝の行末をみる旅のおもかくも霧そ晴れやらぬ紀

浦白こうし

月影ハ神秋の空さえてとく霧ふりしわきちらの風く　定良

霧を吹しなひくすゝきハかくれても鴨霧ふりし庭のられ竹　雅康

ふと濡るゝ軒のせの夢路弦まて霧かくしとてなやられん　持通

こゝろ唐衣空もおしまほひ衣秋の花を霧乃ふかく　栄雅

下草ハ本のしぬ霧におちそひて杉霧ふりし谷のうまれ　公祐

おりふこと　実隆

おきかれといのろかうまハ諸人のたかふこゝろ世のおりふしそれ　御製

さためてもおりふしことさ世の中ぬ人我かりしはうてなかるらん　尭淵

かくさ秋の稲葉ハさそもつゆきえとおもへてるさへ人ゆゑとや　義尚

子孫ともとゝにをるハ神そのそかゝる世にも濡よふ哉しやれ　道真

年ととの夕べ清めておもハれるか我もやとしよりや聞まて

永正九年九月御百首之内　出題済継

あきのくれ　実隆

清しし秋の風荻すゑのあきのくれきそのりてしゆかやきるらん　政為

うひるをとゝし吹くゆとや野千すゝきやたちうくれさや野中の

ひかのくれ　御製　後柏原院

ちらすとて霞やいつく梅のちれ句宮人も中々よしして
雅俊

なれかくかへてもえん梅花も又言すくてふゝむ梅枝
かきつくる
海住　婦小将

たくひしもあらはみさくらのかさしけり苔さくは池の波もちてこそ
やとこなり
御製

霞すらぬ心緒をくもそのつらしきる康すつの花まそありける
とこゝ春へし
実隆

ときとあぬ霞もしるそわれ世にや花なるはくみくの色もをすて
うちすへ紀
海住

すきゆくもうらぬ袖をも起すきと雨ふりやて色やすらみそ
あたらしら浦
雅俊

ちらはすとも又はうてとん花ちら浦野は秋風のこそしかるとを
ちしのうち
政為

ちりしくれいつり深くしく嫌ちる花はたまとちらしくちらさと
をゆすきる浦
実隆

すめのそれいつともまてのねかけりそれは雲の梅のひらくそのつ深くる浦
うつう平人
政為

うちむのへるてをまくはうりそへ岸のひそのひろりは清てありしつゝるゝ
御製

假ゆもいまるゝし夜をぞ埋火の宿をかくしてありきよんとあはし
ありつける
同

けふはそおりけらそをふる雪つさやうつさうしはなさくそうりん
ありつきも
海住

とうくて又ここくもさうぬ霞とてきみのめつうしおひはうらん
はるかふしし
実隆

かゝる河小萩がもとに秋袖くれなゐの露かゝりて

おりふしと　　　雅條

ひとはなの秋をしたふ床よおりふしとなる蛍すらもいつかあきなん

通為

さなくにも見るにあかぬ月のころにやうけてきさなん

家集の内

わきうたを　　　後柏原院

はしいらすは影とこめて都のたえし山の名をとよく見えそうなれ

ひめおくれ　　　同

露の宿露せしおれとは橋の花にほふや世に知る人

玄隆

いそてくる人かよひし橋のかは白露をもとおくよかせの音に風

うつろひ　　　後柏原院

はりんもん露やよほしう見えの光てはしゆかりの秋へ

あかつきは　　　同

かへりわれは光のあかつきは露ぞ知ると思ふの御とはれまさん

寛文七年九月十三夜新院御當座

ちかすまき

雅章

とふ人も又あれはいへ花すゝき袖のうへかる露の夕くれの色

資冬

なれくわりすみはく京の都路風のまふくさそれまさらん

通茂

すみ染まて露のとく雲の小路あつまれの月ともと見て

時久

とむ人をまちつれはのこれまされわらしのふみを待まさらん

きてみよと人まねくらし花すゝきほのかに野への人のまねきを
らしとみゆらん

宗量

わくかせをそよきのうへの秋たしかんてさゆる枕かな

雅高

わすれてもまつらめ人ぬはし紅葉落葉まかせにちりまくもおし

道寛

をきゐても夜半宮ほくらしの紅葉露もおもへのかはりもして

弘資

みかりする松よまねてさらぬ宇治にもゆかめくつかへりもおそ

昭房

御製

ちくさふそ咲くさゆるまゝのそらし紅葉の下にをさむひつ
うわを秘そ

宣勝

うらやれたりしふかきうらのねをはなかくれつのうらみをと

経常

わきりを見しそむるをかへうしを待もて結わ出や

公綱

あのそらへ秋のみ○そうらを待も深のきにうかの色のさひしわ

隆孝

待さへる山のつゆをとらの○をまたみてひとつゆすゝき

時量

すむかうせいひそのやまかねも秋とく秋風は汲せる浪に
わりゆと

雅房

押さ海さ出やよ秋にすみ波も我が待の○にやすまさん

経尚

をのよにゆくさわる世ありの人のありもへの我かくらん

あけわたる霞をひまにそなたへの初音もかよふ梅かえの花　隆豊

花の月もくもらぬ人をもくもらすもわかれこそわかるゝかなし　御製

むかしをもかたりつくすかたいまもひとさくらんくもかな　道寛

同廿三年二月廿四日　禁裏御月次二十首題

右之漏脱古之

わかなつみ

さえかへる春もまたふるしら雪にかすむ山のかすみ　季信

このころはかすみてわたる霧さへも浦のはまへはにほひけり　隆豊

枝さへも花にうつりて色ちかき乃二十あまりのわかなみ　季保

こゝろさへ霞にくもるひかりかなはるのなかの花のかをりけりて
ひかりそれ　雅章

むかしさへ一かへりしてあかぬかなむかしの花のこそあらせ　御製

めくりあふ梅かゝる風のにほひさへ満ちて出る句かな　公規

ゆきもして梅ひかるひかりの梅かおもかけの袖よりも　光雄

隆光

うれしさのあくるさゝ小柳のかざさへあかりもみえさらひと
なき花のくちうへにひとつの花やさしき春のおもひぬき落く
英仲
たまやかさ
ゐて淀むく糸よりも緑の糸柳風ゆたかにみてぬれてもなきをりめ
経光
まつ花より三絵あそこるの玉やなれみさるのいろたはひく納風
貞従
山のせまうらる緑帯て青やかになしくもり咲のましし
資磁
かゐさま花山林みちのたゝ柳にかよふあふるるの夕風
基芸
きて緑の川影うつる玉座なおかひく玉とり夕やいかぬ

かさゝぎて
かゝるさへ冬の玉梅さいて春水を若乃名をさわゆのさつるとゝ乳
時方
春かれ花咲淀の桜詠はつるにわけ梅にもも新をうつして
仝量
たちよりておもふかへてそがさほりてに咲り又こそ誰のもれなに
定淳
かとゝあそ
ほのふらや鳴つとさきあやほしきも稀にも花物にも桜かよふれて
雅裔
実光

とふ人は我にうつしかへしおもて初音まつと人のうくれしを

宗光

花もねと見ありとそ有明の月のかけまてまちくらしけれ

淳房

ふた声を聞てはたゝかゝりけるときゝつる声をしゐて忘れし

兼豊

すゝめかる尾のむらにあられて [illegible] さはりあはれなる

とこ夏川

とけかりやわか [illegible] ふちてあはんちりもあらぬ床夏のかれ

実維

ちるをそよむらさきふとしるとこ夏の露かゝるかな庭の中の錦

かふの花ひとはかりは常夏の露の [illegible] とやいふらん

雅章

法の文むかしをよせてこゝろはゆきつゝわすれぬ [illegible]

季縁

こゝろあるむかしともけてこそ露もはらふかの袖ふかきなる

とふかひもなし

氏信

今の袖のかをりをそめてむかしをもさそふ人の袖のかりん

隆平

ちるもりとほくむしや虫のかゝるおもふはらへ [illegible]

有維

ちるくもをうつりわたる庭は白つれ [illegible] とおもふ夕への世

季經

雅喬

なつくれと雲にしのひやりゆきかへる都にちらす風のいさましき
ときはへし　公綱

とく霧のおもかけもみえしいろかへ野辺のなみやあらん　実光

こしれてそ秋への夜のあはれ霧しむすさまやなきひさん

秋そのうれしさをみなへしあきの風もまかひくらん　時方

志ら雪のこしき

志らは霧の秋はしきくおさくのゆき袖のしほれまん　兼仲

つきもかくかすむまゆへにたく人のうつしのこすき　行豊

すきゆきはさてもすみなれぬさくらの花の袖のくれあり　基共

とみゆしあふさきの月の霜のまつのとあかみをまき　家量

きえ谷川のもとのしみつきこえあかりしおもふく　重絛

ゆくもさえのたちしかのね　淳房

あくさくはのおしく夜もぬかをかすみ野への月さえ　俊光

ちくさにゆふうすきく夜かへしくわかみ野への秋風

うき世かけ露のいのちてあちこちの君が千とせをいのるひよかり
参云

浦さそうて紅やうれしきあけりよおもへのあきの菊にほふみ
ゑしりけら
兼連

ちり乱れはなはうつ紫をちらすをへの松にかゝりて
資茂

こゝら山乃露わけられてつゆもかも紅葉ときに深く染たるゝ
実笛

みなみへの垣ねのうすもみぢの紫をもしゆるさかりのやとくさひ
貴治

ちりゆきもみやまのもみち紫にあかき風の花
ともゆき
公親

なかくも風の音にて宇治川の水すゝしき秋の音
方長

ほとゝぎすかへるとてましらの鳴音まかせつゝ木の葉ちる音
貞延

兼豊

きくも紅葉ちる川の松原もみちしてにかゝる川音
あきすゝろ雨
御親

言光

その音色ありて月影を雨とながめつゝ末野の嵐の雨
豊長

ゆくやと春の日かすみとかひくまり蝶もまうてかすみてゆく雨

わかのうらけふの春くさしきしまの道ふかくしたくはやくとも
隆孝

みちのくてつくる宿にも夕くれより立たへしねさけすゝ雨
民信

覚雅

かすらちの池くさ柳さかりかき里乃まつりこのさとかな
隆平

ほとゝきす声なき宿のやよひてきのふそのかすみのさとかな
うつゝ哉

つゆのまも雪にさへゆるけふの風みなそこ深き霜やつもる哉
公量

とこしなへ光をそへし国のためにいのり捧けつゝいくる哉
英仲

むすひおく契もあつくよろこひのあさきためしもたゆる哉
おりのわか年
公綱
資行

おりにけるわかのこゝろもおもはしまれなる人のゆくゑをそ哉
実維

とものふせるあのかたみへとこよりおりのけふ也
季仲

ちひろしやみなとのまゝとうけ見えしいせのうらわのあはれけふかて
公規

やまさとはとしのくれにそわかれけるきのふのはるをまつとせしまに

あひかねて 兼連

ひかりさすあさひのかけもうつろひてかすみのはなにまよふはるかな 有維

人をまつよひのうちにもすきゆくはとしくれかたの心ならまし 実富

こゝろやはひとのうらみにあふことのかたきものかはなにそゆくらん 芳長

ゆきもまたあさきそらにそはなちりてはるかにみゆるやまのはのゆき

うたにして 御製

ましろなるゆきのはなにもみゆるかなはつはるかすみたちそめにけり

ちはやふるそてにもふるのひまもなしみやまのさとのくもかゝるらむ 經光

をしむひとむすめすらうらめしくてはなのさそうしく 成信

はるやなほふしのたかねにあきかせのおとにそきけるかみなつきかな 行豊

すみのえのきしのまつかせふきそめてうらなみとほくよするころかな 雅章

わかうたは 定淳

あはれわかのなきさにむかふよのなかをたれかはしらむわかつよのはし

宗量

月夕をとふいくよ経やのわか涙さへ行あかりひとよやとりしその衣

きく人のわかれをとめて行川きえ露わくるかたそ見えぬらく

豊長

ちそしまきたゝ菊露わかる衣たちて猶さ経ても錦の袖をかさん

資行

ほゆかし

公規

露ふかき草をかきわけすにゆく人をとゝめはゆかる那へゆめつゝ続

夕ぐれは神のかけて露ふかし君かのこゝや秋のおもひを

季信

あきやは月とめてつきはゆめいく露ふかし秋のたくさに

定淳

忘れえぬものまつとも神も菊わけ人を露わけすゝね秋のふかく

おもひやと

重隆

わか人のおもふかく君か人ひまるせよ河せのきをまちらん

貴治

光雄

ふる雨のうつくしゆふく此ころのおもひまよひて花まれしき

資慶

露まれしことをわけきぬる雲のてしほえたまかうつまて

さこそやかま露ちりきせて松かふといのち清くは袖そぬれしむ

雅高

天和三年十一月廿六日 御當座

ちる花ゆき

ちる花の色いそひふかへしをしまれぬる本のあふ初雪
基煕

ふきそてあれつもるときゝて初雪は千代のためしとふきかさ
行豊

ゆきふれはくもる風をもさそて夜はのまにつもれる初雪
定經

今朝はそよ今をさかりや夜の雨はれさのうしくはれる初雪
資凡

[illegible]

さらに猶かけし色をかへ中ゝかなしきその袖の雨
実家

のかりゆく猿のなくはすくも雲にかくれもなきすゝかな
御製

袖にをのするしるたもとをしぬ時の雨ぞはなる
時量

すみそめてその里とまれはなほ雨の調にかよひける
時方

とはれぬ宿にかよふ心のなきかほにそのうしろかけ
隆當

かたのそら縫はいつも一すらのまかけなる時雨かな
宗光

まれなりしかはなきの峯の中にさひしきその袖の雨
定淳

うきことをしもさしてものかなしあはれ理なきに
長義

実種

つきそめし露やいくよのひかりかへ月のよそひさへひかりそふ火

光雄

みさりおもかけ松のうへ春にはよそよりもひさしくしられいつまても

保春

記す月日のあとのこすちかたそむくしるしもひとへ今日ふる袖の涙

あはつさる

資冬

わしかけの羽をそへきもくわつき今日の浦やれともらん

基熈

かきらぬ春かしもかくていくよろこびをもえぬ身をとおもひいでつゝそ

御製

月よ雲むらかひさるあれ山まへなふくらし絶んいつまたゝくらし

幸仁

こよひこそ夕のゆくすゑもちらくになきをさらにかさね膝にかけし

こねらふれ思きこのよしもわらつふにかへる夜床上袖もぬれやぬらく

通茂

貞享三年二月廿二日　新院御一周忌御会

あさかすみ

仙洞

いかなれは色にたへぬ春にも洞のなをいひて誰をそ絶つゝもれ

季経

はかなくてほとけ絶えてもわかさる霞のたえぬにひくやよの空をしかなく

意光

ころりぬ春を絶えて洞のうちにはかなきかすみ絶えてのこる

義延

すみわかるひなをぞきえつる絶えてかすみのうちにのこる春まてて

光雄

こよひのくもりてわかるゝかすみにちりの春もとにのこるかすみこそ

かさはらふ

基熙

か[illegible]やられゆくかり[illegible]しそこ[illegible]つゝ[illegible]

資茂

こし[illegible]秋[illegible]のくも[illegible]雲のも[illegible]

雅豊

つきのまみ[illegible]よりもひ[illegible]

時量

くれ[illegible]よへとやか[illegible]くさ[illegible]

実種

まれ[illegible]としき[illegible]のかよりの洞の池の[illegible]に
あひ[illegible]ぬ

保春

あつ[illegible]人[illegible]て[illegible]ひ[illegible]一[illegible]のかく[illegible]に

経尚

むら[illegible]ひ[illegible]中[illegible]は[illegible]ん

実[illegible]

まりなくも[illegible]て[illegible]ひね[illegible]て[illegible]人[illegible]ひ[illegible]て

長義

むさ[illegible]まうくあひもむかなれて[illegible]人[illegible]の秋

通[illegible]

ゆ[illegible]秋[illegible]の[illegible]ひ[illegible]秋の[illegible]のわね[illegible]を
おりやこと

貞九

おり[illegible]とおり[illegible]さ

雅高

[illegible]とおりやし[illegible]ねる[illegible]

みどりおくいそねにそよぐあしのはのつゆもたえかけくのく

隆英

とりのねもかしこそのゆふべやそかれ秋のわかれをしらぬきのしらく

幸仁

假名題和歌抄下

拾遺愚草下

大かた處すて秋の法よる法僧の經よむひとはたくましいのこれ

文字をかきてときて秋のそらさ　なもめつらしきもむくなきこそ

なるもみとふかりのわさけよりやうてそら行く神の露かな

うとめても秋かりかれ宿りうかてそそよるさ神やうらくと

めくみねとこれは宿りし妻の東風よおとろく秋はさふくなり

うらふれもおもひぬるれの神のよるさすゑもやうて秋の夕暮

みのかけの雲かりさちの秋風やおりふゆく露の竹ゆくむら

うつ声も色ゆくわとにとうさそ秋のころもの神むすふらん

まつさきさんのすそ神の小田の秋風やなにひきしとのこりゆきなりん

むかしとの宿をすみてそおもひきうたそのすくの神濃月らけ

これよなりそこの秋はなをすれてのわく露をおもむすまても

あしのくらくなりけれはいつくはあまたの月の秋風の色
こそく侍て本歌もおもひいたされてひとしもおなし秋のまさなき
やすらひて猶も御月を残すとてかつらの二露そ隅のかの
うくおもしろくやもりたまふて二百年に淡き秋もと雨に

御集
文政元年九月廿八日後桜町院御一回忌品経の写経の
ところところにて　おもひつゝけぬ

御製　後桜町院

あはれいまそのおもひにもなりぬらてはつるとし月のあふらん
むかしのこの頃たれの月の光のしたにこえつるおもひやいつれか
わかれ夜の涙のうちにさりめてやさしなきよりのもの西にの
なかれてなくての秋の風ふいつまやとさん神の月うけ
なかれて堂のうへに住なへてとことはにそ月もとゝめ

ふるき秋の月もうつそのこの世のこえ世にありさりや

霊元
八尾前右大臣二七日念仏の中にて思ひつゝけし
おもひやることゝも

実陰

すりしもはなかきおもひし世中にそれそれのかはりのなきむかしのを
むかしのあまりいくとせ秋の花さかれ月にむかしの人の面影
わかれてきし秋の中にたかくのこのされたる和歌とそれ
みそれすと声しおほりのそれたちのこゝとも雨しめとちりてある
あはれかこの世つきてもなかりける気わかれるゆく末
ふりたへてみをとられともひしてのこゝに宿とられて
活世のまことにのこゝそますてまゐし堂はきつかしまとるらん

同
九月つゐ右大臣を度に六字の名号を冠字の
歌よませてまゐらせける

同

かゝる時ありてこそつゐに人はあはれ世といつの花にさそはれし
むかしは秋袖うけてうきを世とおもひしかとも花のあはれ
わかる夜の夕ゆふ月にむかしは月をおもひし下にくらへしさ
こゝとは松むかし白雲のたちそめしかけのわかれつけぬ世かな
たらちねの世のはかなきていうつりまわりそむるおもひさかんなりし
かけにおもふもれ月さへむかしの文字ばかりに見えたる

書房上梓
十樂院御門跡　盛秀法親王うせさせ給し時南無阿弥陀佛の
字を十首のよみをよみて詠く

小月柏

なきさへもあはれ一儚なるこの世にふかきおもひはうつしとそおもふ
ひとつ我のむすびきとも秋の風おもふ心をせめてもみしむる花

ちりぬるをんてたゝし春の夜月の秋おほかくさそへやらん
けふはけゆつりとさけるまの世とうけひく草のもたゝしと
うれへあるたくひをらん秋の日も夕けまの庭は露
そらにて秋みてし月は木の下のむらさき袖さそりやいはする
ゑひえまおもひへうすけふりくのちりへうしる月は涙のおほく
かゝまたにゝ鳴やらんたまりたるゝある秋の空もうつめ
ゆふおもふ暁やさ夜の中まてなれゆかし袖のうへまなりある
はるへとし二のたよそておもひはりもうるのさいてうけるあや

同
道京聖寺中よんの人てそうすへ松のたくさんさしてあさ
かへわたとおもひうけねてふそてなくありけし袖もあるま
不動明王の文字十首よそてよみけし

同

七十の年をかさねける老の身もうれへのみ卿
也はおもへば袖をおさへて深き人々をさとしたまひしかたく
たゞかひとりしたまへる君が代よりもうかく従三位よ
をいね日もなくてうれへしる人々もすがたかはりし世なりきり
うつろふさかりの人々とかねてとわりしうきことのかた
三河の国の守も後の世もゆるして世はおりてもありのとゆるしをろん
やまとうつるは世の姿を見ぬるのおもひうれしきとうりしあの
うつし想ひ病のわかり花よりもおもひこえ人のこゝとをやせん
まつてやかむかしよりも悲しうつまりにうつる住所ありきり
うへのおさき法ねもまさに物がたりの人にしらのたから

天文十八年五月四日
贈左大臣義晴公追善六字名号和歌
法ら経ゑる折ふし郭公の声をきくにつけてもさゆるにかよ
なみだもあられふく　羽林中將

藤原兼良入道関白殿
なき人の玉のおりしと郭公鳴きてつゆまもんまするらし　うかるを
むかしくされて経をきくにはかなさりわかれ
わりし世のそてにかゝるらん世をうつりと世のよりもゆるし袖にれ
ぞしのみを見はかなきせのちをさゆすとあやまちつまるん
らのひるよも人にあらし家の身の法とぞはおりなかまる世中
かけよ夕ぞ神世とてぞ人のよそよ夕はわすれとよかなしき

書写山性誠法師七回忌追善六字名号和歌
藤原公夏
なふくほとゝぎすもふくそむけるは法の心にまくやこのゝれ
むかひをくえて深かぬ松風もしゝや七とせの夕のかねのさ
あはれの法の車はふるさとへめぐりくる人きえにや種へん
そのくちのあとに残りてたましゐもさすりし　藤原乃雅

つゆのミちしるべの若かにさそはれ行人の春は無もなし
ゆゑの春も神かぜぞふきし御のりの花のたよりにうつりけり

前大納言雅春卿追悼和哥法花経をよみ侍るに
字[illegible]品よとうてよめる

釈道澄

ちる花の権れる年とうつろへても消しらぬのおもかげやうつりね
よのなかは知すらにて宮とさんさむさしのうつりも秋をまたれて
わかれわかるゝ人のみのりのひらけんはすゝみにかなしれる御をと
うつひらの花もとまでもちかくあらはれちりそて花の梢のえ
あのはれんれふてのこのえかひとわかれ御世のかミのわたしの外
月はなとぞするかとの心そてをそしはくさかつきも御かし
さかえるとぞけさくしてそくともの御事はあらしみそくなるさ
うつる月のみかけとなれる新もれにおもふねてもかさ新

陽光院三十三回忌追善の歌

昭心成卿

そのかミしのび消しも秋のなかてそ色ある紀神社の縁なる
うすれ文もうとミと見えるは古へをわかれぬ御の面影うつる門
きのふミさ秋すらえてる秋ふたかりけのうけさをとおもひいそ行く
むかしへる涙しうつくなかひとうもおもひうつれむすしふ御しや
ちらやかまなくおもは世の春も都にひとしき秋ふえ紅を
照らるなも文春る紀うと仰ひて心をれとかりよその月影

興意法親王

うき世もしらぬハ程ふかしたかちよのかなし紀つかるとかそへて
ふく川かさ消とミくもそのつき落の花かれをしつへすみにや
つらおもねをそれおもしろくミ手わかりミ手の秋もミれ花のか空

御製

九月の末つかたおもひあまりて侍ることよろひしうつろひゆく

叢紀からすゝなくさしもへさかしき紀かれしさん仰せを経ひ
御りけるよ諸法実相といふを給ありひおて句のくゝし
めまを給くいさゝか愁吟のおもひを給へすゝめし

後陽成院崩御の御時也

御製　後水尾院

志ら雲の峰にかゝりとゞまらぬそ姫の寸分もえねそうかしき
よそへるとくひもちられ野にかの花れ中にもあられやすきことを
かゝるねはらても秋の露けさに涙たくなくすゝのたりしられ
こゝろわけのをかしの尾紀世よさらしかせへさ思ひとのあるを
あらさらさはらね谷のたよりひかもかゝるはけささとさゑかなをかれ
はるへきわとにわらいかくはらしひと嵐の末法神よりけても
はりくまうろりそうもうれとうつゝなるとのよおられ世中
うきつきし身のとあきたに何の名もすれゆくへさそ都世とそ思ふ

新廣義門院かくれさせ給ひける時六字名号御歌　同

なむあみだ仏の世となりしとおもふことももうさ涙されはて
ひとひゆてあゆきすゝみ西の一声と縁とよかくさねそうきさ
あさくれよわそてうちふくさもめのすへさうにゝるん結して
こゝの世まておもひのとゞきにとゞかりの比一てそなふく心のたまへ
そはれもえへ此てもこそもおもろつゝねせそといまゝその秋安にかりて
かきひかはれわるしもおまれねばこの夏の裝りぬるかしさ

後陽成院崩御の和歌

諸法実相

平時慶　平松

あらさりさかえの種はたちて雲うくれゆく月とうんとか
よのなかの末のあきけれは君かうらむ露うりとかたかしとかれ
かなもすくさゆる家こそなるなかれそれもうつと思はれぬをも

うき世の世をおもひけとおもひしさくかくしもとめゆるゑんかりしさき
たきし海のたよりすへらんやそて六のちまたにまよふらう兒
つらきおもさよいのそも法へしゆるといのそ々寺常に法
さけなちりそむきさへありし春秋の花も紅葉もいつまでかみん
うき身もおもひてかくして月の影や海上の法味するらん

延宝六戊午二月九日　後十輪院入道忍

光録のおくり

道晃

あきひとしわまるとも二ゆふさの年月のかはらぬめぐりきてよそり
ひめおもれおもはまおわりてつてもとを年ま仰のうちもけまたら家
きたらえのそれもせのひとしおりのおもて神のみちをとしく海しおもて
やらくさの法は中にもくかるとむすくさそろなかりへ南く
うしおもくはなりへするのはよくてつもの人へ法海よりし後のむすんもと

元禄七のとし神無月すゑおもむき本にの大乗青蓮院宮尊證親王

四千あまり四とせの春秋かさりわかうんの夢くるかきこいかにも
教るそてふとりにいつまみのゆめをそるやうせちまじもゆるかとりの
かすしこやうこうされ文まする経文の法にもよひつくしやあてもそれ
ふかくさあふりやとしみつの法の果をかひらにすへてもいひ
極楽の宝の法も法界にかくりぬ程て後ちらへとを
讃仏乗の縁となすもしむうし

基然

なくなきこいはくいおさんもわかくふのあくれまで京にむすのをそわま
むすいきへ在おかうりしよかとうりよとかなりへとをかすこふおちつて
わうたとく藤ハ家おとをかくりむらりかうらう影もささていうらまう
みかたのゆ四へおもちハ年されいく文わきもれきさんいりおのハのかく
女のりし山んの月もよしいのゆすゆるも乃すゑなけなきもすむしるか
やえ川かくようかきは人しおへ六のそちふて海の人へさうれ

貞享五年二月十日　仙洞御夢想春月法楽

御夢想

みしや誰てかさしむかしの人のまつとはふるやまそふるかけのまつの

初春　御製

ことしより梅さくそらをこれも春日の光のうちにかすみそめつゝ

山霞　幸仁

立かへるやとるなきそめん春日山みねをへたつるかすみの下もえ

夜梅　冬経

この世にそうつるかひもなし都のよるの月にうつるむかしの梅の花の香

春曙　俊房

猶さこそ待くらん春とみるさくらしてそあかぬくつきかねぬる

待花

まちわひてけふはくとやそれはいくつかの花をとそまつ

惜花　輔実

この世まてをしみなれてあかぬ身をゆくへもしらぬ花のすみかよ

暮春　時成

すきてにほふの花の色ゆく春のこる春や庭のさかりもとゝめ

時鳥　宗條

ひとこゑはゆく月よりもなかれてもひとこゑいつれ山のはをみて

夏月　経尚

おもはすもこゝろにかゝる山のはにみる月も涼しき

夕立　家熈

夕立のすきゆくあとのなかれの露そ入日かゝる

初秋　実業

荻風　惟庸

秋きてはひと夜のうちの荻の葉にすゝしくかはる秋の初風

ゆふされは松にあまりて秋かせの風よりさきに庭の萩ちる

初雁　経光

しれはつるかりのなくとてくもゐより先はゆかりてきこゆ初かりのこゑ

秋夕　尚仁

かくてのみかはらぬ秋の夕暮の世はなくさ葉しもさへ露のおくらん

野月　定基

野はらくもたえぬ庭鹿のなくねかくるまゝにも月ふかきかな

江月　為茂

このすゑもかはふかきかはの月かけの月かしこし浪のさえてゆく

菊露　実陳

おなしくもゝとの花の露のこゝろくにうつろふきくにきえぬおもひ

落葉　公規

ちりくちる木の葉にまさる庭の面のあきかせやきえぬ露のうへのおもて

千鳥　定誠

はまちとりいなさ風にてうちかへし浪のうへかくやなくらん

雪朝　時方

みちとなるあとをもみえすふりつもるゆきのあさけの梢の雪

祈恋　兼熙

ゆふしでをかけしわかゆゑきたのみの月かけて神もこゝろにうけよ

契恋　御製

露の身てちきるいのちのよの中にかへすかへすもおもひそめぬる

逢恋　行豊

ちきりのちのあふよたにこゝろにそへて又かさねあふかなしさ

別恋　雅光

ゆふくれをまたぬ人のこゝろとおもへはよそのねやの梢よ

久恋　為綱

[illegible]月

帰雁　基熈

[illegible]

暁雞　資慶

[illegible]

浦松　通誠

[illegible]

窓竹　実陰

[illegible]

旅宿　雅豊

[illegible]

神祇　基福

[illegible]

名所和歌　四季恋雑

春

音羽河　仙洞

[illegible]

通村

[illegible]

公規

[illegible]

春日野　光栄

[illegible]

葛城山　時成

[illegible]

三嶋江　為茂

[illegible]

こしまにやあのへらりもまたうのみよ芦のかりくのかしいつらん

芦屋里　仙洞

かりてゆく芦屋のさとのわか人をこさすやまへとのゆふなみをち

雅豊

すくもたくけふりもひくれの里のなく芦垣に秋ぞすゝしき

公晴

春のいろはわかぬなからやうらとくかすむ芦屋の里はわけかの

伊勢海　基長

たらいて貝やひろはんいせのうみゆふなみかけてさ

兼豊

うらちかくみるめも春のかすみをもふかきいせのうみつ

大淀浦　豊長

かけての浦のみるめも春の日かけにかすむおほよとの浦

宇津山　通茂

蔦かへて山のはまたうつの山そのまゝにすゝしき夏に

田子浦　義延

みわたせは春の富士のね霞むたこの浦の松

高久

さそふとも沖の鳴門もえてしらぬなみの浦かな

吹上浜　康綱

春の日のなかれも吹上の浜風そよくも月影

高砂　淳房

まつとてみるも霞そへて高砂のをのへの松

末松山　兼熙

もの思ふくらしてみれは春なくも末の松山

光栄

うちむれてゆくもしらぬ浪のみなとの末のすゑはるか山

夏

美豆野　仙洞

秋ちかき沢辺のほたるいつまでのみとりの色そ見えける

大井川　尚仁

よるの鵜の篝火もえて大井河かゝるせゝの夕闇

信田杜　通村

大かたのいつみの杜の中にまたはしるゝ秋のこゝちこそすれ

後西院

ほとゝきすなほはつねをまちわひて信田の杜のゆふくれの空

しつまりて蝉のなくなる杜の露をしのふの森の秋にこそあれ

宗光

ほとゝきすなかやとりしはしのたの杜の木くれ

矢香久山　実陰

わか葉さすかけに立てゝまとひつゝ矢香久山

猪名野　実陰

さみたれにまくらかはりてかへるなるゐなのさゝ原

大江山　光雄

新たに秋は未たき大江の山のみとりの色そすゝしき

大堰河　通茂

夜ふかくも見ゆるかゝり火の影くるしき大井河原

松浦山　通村

暮るもあへす松浦の山のすゝしさ沖津塩風

須磨　実業

須磨の浦のまかきかもとのすゝしさに松吹風の山郭公

道晃

ちりかふ人まてほとゝきす月のみよりもなく成てそ我のうへの人

秋

嵯峨杖　　後水尾院

わけゆきて月のあさ夕あかすみよ千代の杖の林のこすゑまて

宇治川　　芸方

秋ふけて夜をこめて宇治の橋もやかておもひの川なみ

立田山　　幸仁

まつよりも秋の色なる立田山杉よりもなほ紅葉の外

それとなきゆきてそみるらん今日の立田の秋のもみちを　　道晃

三室山　　通村

なく鹿の声のみ山のもみちはの色そまされる秋のみむろ山

みむろ山の紅葉の色もむらさきの錦をしける嵐ふくらん

伊勢山　　雅光

いつよりさやかにてらさん伊勢山の月の光も秋の夜

泊瀬山　　相尚

はつせ山あれとも霜もそめぬらん月の上の月の秋の夜

明石浦　　雅高

あかしかた月の光に沖つ浪あかしの浦のあきの風のうき

野路浦　　意光

みよ秋の野路の浦に咲かゝれ露の玉のかゝる蘇らん

清見関　　長義

きよみかた秋の夜の月やさえてみる関もりのらん

武蔵野　　公晴

すゑもなく武蔵野の草むらの尾花かつらの月そさえける

白河関　　定誠

とはるゝともならてたちてひゆくすゑもいさ山川の雲乃わか勇

文殊師　通村

とふ人も風より外にやまぶきのたえぬ浪の下露

冬

小塩山　行豊

ちはやぶるみちのよしの山をにはをも小松かうへの雪のおもさ

清瀧川　経光

さゆる夜のせゞのこほりのみなとをもせきとめかぬるけはしさ

吉野　光広

みよしのゝ雪のふるさとにたちまよふ山のはの月の色哉

住吉浦　通誠

よするなみ松をもこえて吹風にふかき浪の秋の夜

あきをわかち荻原の月をすみりしの浦をたゝく千鳥かなしくも

通躬

かんやそ冬をたちのの菊はなも浪に浦かぬ往よしのうら

田蓑嶋　基熈

ゆきて久しきつもるあしの葉を波の音さゆる白き

通茂

あまのはしだてさしもなきて田鶴のねのなるかは雪

鏡山　通村

おもかげのそのまゝうつる山かけはさやけき影の鏡なりけり

浮橋原　時方

たえまなき雪の神代の山もとより出る月の影

因幡山　経孝

いくひらの雪にうちなびくまつのかげもたちかへるまで

たくふのおりをきせていなり山そこえまと松乃しもやさ

千乾山　公長

雲よいりし露にしられてわらちかふやたの浅茅風の音迄し

安達原　重源

わくらはの中日ちらしく秋風に時あてすゝき尾花のやへ

捐尚

たとくて稲のくれやちらぬくのわくらはそ露とを葉しも

恋

伏見里　通村

恋ひてあとにいく夜ふねわらん都にかわしきの床やさむわ

基福

思ふことにわつ夜かゝてゆきかへる秋に奉しふの里のなかりけし

石瀬杜　光権

わかりはいはせの杜のことのはにつゆうちとけてたゝん上

人伝に君かうはさをきく小野の杜のあめいはせてつれなきをはらす

為綱

益田池　幸仁

これは人なまよまさきて冴ゆさの益田のいけるあさか今ひとつ

二見浦　十楽然

二見ゆくかぬさの中のうらとりあふきれ浪よ神やめしきさん

鳴海浦　後西院

なましゐのかひの手ならんあすはしにゝ人すみきれなつしたのあれ

うら名世になりゆくのうらこせあてさへわりしつ夜の契りわなら

為綱

その夜の契りはわさにかゝるみをくうらそのうちの世を待くやして
や

阿波手杜　道晃

あはれ我よ夢もたりしそれからも袖かしおいてその枕かな
手月の浦のあはひとそのまゝにわかれその枕がみさへうらめし

礒間浦　　輔實

つり袖をいそまの浦のわかれかもぬるゝばかりやまそでほさき

濱名橋　　經光

をとせぬやくる浦かぜのよるかたみかたる蛙はなれぬかりはし

高師濱　　雅光

塩ならぬ袖をしほやうらみわびてたかしの濱の波ぞくだくる

筑波山　　通村

入かねて涌やくるかし涼しくは山もとのしげき空のつくはねに

光雄

ほくそねどふりかえりて持らん無きかきのかゝ山

名取河　　時方

よしやいかにいまはと川ぞれたてそよ涼しきにしよるか世ゝの契りも

袖浦　　通村

秋風にそなれてよそうしむのしつくかなしむ袖のうら浪

雑

鳥羽　　後水尾院

とば川や流れもしらぬ岩かどにまづよせてこそ松ぞ分くる

通村

あさみどり松の色かりもうき浪のくまかしき浦の雨かな

吹上　　道晃

あり人の秋に思ふに捨られて涼しかりつるむら雨

菅野河　　義延

いかにしてもよしやいかにたれ河浪の契りかはらせそ

住吉　　後西院

枯やてる細江のわしのうきたてて波にすゝるなかの松風

資業

布引瀧

うら波のよるとしもなき布まつつらぬくらんすみよし瀧

宗尚

白ぬみゆ風にたゝしてさらすおりなかゝ布引の瀧

長柄橋

尚仁

いにしへのあとはかはらぬ長柄橋つらくらとかぬ名のみ残しそ見

生田

道晃

くれゆきもわけてみゆらん八重霞のかたはかり杜の秋のみえん

逢坂関

泰然

あふさかやきこゆるこゑもぬのはなのたまにそゝし雲のゝやまさ

後水尾院

雲のうへにむかしとなれ人もとゝかすとりそわかさしの山

木ゝまぬせきあふさかの名にし月わかくすらなまやれりのまゝん

通村

鏡山

後水尾院

山の名のかゝみとみえて月かけをさやかにみるはゆくさきのかけ

こゝろをもやみにまよはん鏡の山のかけにうつして

浜名橋

実業

ますらをのあはれとそはかせぬおもかけのさくら神のゆふくれ

白菅

光広

まひらのをしむ秋をしのゝめの今をもしくわかき風そふく

佐夜中山

まてしはし岩かゝりまくるをいかにもいそきて命はしけりさやの中山

不尽

くもらしふかく見えん日本かつて幾人か峰の山すみかさり

雲とすかめくてありけりいかにちるらんつはる雪かな

逢坂山

せき守も逢坂山のあるしならはかゝるねのゝこゝろやとらん

須磨　　　　　　　　道晃

もしほさへくもりもやらぬ月影をかへしていてそすむ蜑人

三條　　　　　　　　資業

おなし津のくにまてそこの國やまかけの末の松山

播磨市　　　　　　　惟庸

ともしらぬ沖のかたへ行ふねのまゝに浦の市ふく風

明石　　　　　　　　光広

あかしかたをきつのふねの月もくれて波の白浪

富士　　　　　　　　通村

ゆきのいまたつもる富士の煙とそ見る河のなかにおもふ

日の本の外まてしられ富士の山かはらぬいろの雪をあさきて本二つ孫

実業

句題和歌抄上

拾遺愚草卷下

建久六年摂政太政大臣家にて末句十首をとらせしに
よむへきよし仰ありし当座

萩乃上風　　定家

あはれなるつきよのまくらもとにたくへてやすらふ萩の上風

萩乃下露

とれはきえかれとも枝をかけよとやさ乃の萩乃下露

秋のよの月

おほかたのおもひはいさしらぬゆふすかてにとせ秋のよの月

秋の夕暮

いさゝらしおもへはそてとうきなからあはれさ乃夕暮

さとしうの鉸

かけまくる人の松風くてさき夜よ出つきつるきあみのよゑ
新古乃よゑ
風をひく薦の葉家ありしこの山そをおれ川うらゑよゑ
うつゝ絶え
ひしうかわられいくせとこそよく人ハ弱りる風ようつゝ絶なり
寂ら川なり
河風よ乗てる浦の流されいやそうらへ今宵ら流なり
夕されの花
二十わまりしともきと思そへつ秋の夕暮し夕されの花
暁のそら
ひとり寐のさすら夜床の紐ゆすまふりれまてるわろ暁
拾玉集
夜今一句もとめてうくてよとしに

末のかたも嵐の　慈鎮和尚
わく雲の梢すき里にられしとふとなかしき嵐の夕されの花
出してこころの
嵐のふかしきしそでも花のせん時てたてそれはよ世かり出
嵐乃山風
雨ともにしおりひしむら霧かりあとよもちる嵐の山風
ふりふりて夜
嵐風のふりふりて夜木そそまさきけるられなりてきよちる
池の荻波
夜ふかく池の荻波冬すすめく山わたしあれ吹くきよ川ふ
ふりおてそ鳴
これするのふりねてそ侘郭公のそらの山よわしよもすのゆへ
山わたしあれ

風さやくいつも山かせにはなれてすまふ秋の夜つきさえた
　　　夜ともなりよ
浮しき(?)夜の雲ものなきまて露にしも秋更まさる人の夜半
　　　ゆきりて雲なき
霧のかたをむかしかたらんそのゆきり深くまさる秋の夜の空
　　　うき深き
夜もともなひ深くなりゆくにやまさりん秋のはれゆくも
　　　これひとへ川の
おりてしへいつかひとつ川の秋さへしからくも月とみゆらん
　　　月のかつらの
秋のさかりをねやかたの月のかつらの秋の葉そちらん
　　　かけりの
はなちし月のかけの中つきあはせぬ夜のは浪まちきより

　　　むかしわする人の
小萩原ねよりや袖のつゆならん秋わする人の秋の(?)みかん
　　　床の浦に
あはれのかしはすゑやなきつゝ床も浦なる秋の月かな
　　　秋すゝき波の
こゝろ海の秋まち波の花を夜そのかくれの月影
　　　めくりてはるて
紅葉のそめさしたひあそひ秋とおもふくれや袖かへしの袖
　　　夜半さし
あけかたによこの山への高き夜半さし夜のあけのいろ
　　　宵けの月よ
わか山の雪やの(?)ゆくかれあて秋くれてとまる紅葉も
　　　かくてかれん

白雲のうへくもれは梅のにほひさへ人のひきとりけり
つゆもひらぬ
冬の夜のみしかりしとおもへとも猶ふかき思ひの色そまさる
郭をまつらん
ちらぬまも郭公こそ鳴くらんゆくをも待ていはらんこそ
ゆくさ月の
めくりあふ郭公にまつはやさ月の波まよりみ 利
ひすいにつけはに
わかれはゆくすゑこえてもあさかりし月に精風そへて
残やゆふんの
秋のよをとはてそわたる君こそに残やゆふんの庭のひのまよ
めしからはする
わか袖にやとるかけたもみえすゆくよりあまりにはのうつろふ月 親

わかれ花の
秋の夜のわか花の枝にかゝるをみつゝぬれにけり
ちるをのこのみさき
さそひくるさ枝にやゆかしれんさらにもふかきかよりさき
人のこゝろの
わかれてうつろふ花のえたかへれは人の心はかはるとそいふか
いりせの山寺
わかれさる吉野の川のさかへはしりせのむかひの中にまつかれは
夜寒さや君か
ふるさと山桜さくや君か一人そ移りもの花なれはゆくさきそ見る
鳴くれゆく
明ゆくそ春の山かせはたえゆく鶴をくれゆくわたる秋白雲を
右一の下草

賤わらハ人かすまあふ榛わらの下行水もかれゆくも
かれはらの河よ
あしそろうにのミ河よせ侍の春わかれて花とかせぎにけり
すしとさえて
君か代のつきぬ中せのおもかん若のつゐぬかすしとさえて
おもひつきせぬ
龍のくるミの松風力にはそておもひつきせぬよの中思ふる
たまみ鴻よ
たわらくらにもの春わかれ河ふ立よきみの鶴の亀の花聟

玉吟集
古今一句をとこめて春陽くとふみけしに

花いろ衣　家隆
いさらへのその里人山かきの花たちけるもそれよめきさむ
うくひすの聲
かきりおれ春をてくれぬとけふに出ぬるかさらにひと聲
霞の袖
春てゆくうすきの袖の春ふけて霞れたり立せまつ侍る姫

古今一句をとこめて夜の月よみける歌
松井の清水
里ちととへ人よそ宇治の我門の松井の清水をくみにけり
これ立起の
昨夜はうつり春めくも句よふ花さらる月のしるく秋声

古今一句をとこめて秋の歌よみけしに
ふはらし歌

秋中の山ほらしよ詠めて入けるよ三日月かゝら
ゆをはなれける
いくたびの里をはなれける山々の瀧ばの谷よかるとめくらん
たすらしと来
ときありての一夢の夕暮になすらしと来る来ありしほと
ありしあるえ
お坂の雲ゐし月見川にめてありしあるえからか月法師
袖うし涙よ
今川とちやすらへ只君が身の袖うし涙よ庭かゝ白らく
おもふぬ月そなき
ひとりかたありしも涙く流の影の面影をおもふ身月のさき
思ふちりとは
面影うれをひはせめば立田河思ふらうとよはるの身やかよ

ゆりくそめて
思ひしみてそしる竜田姫とやみしその山の峰のみやと
東冬一句をとめて冬冬すみ詠しよ
うつろひ詠る
冬られてうつろひ詠る八重菊を九重のよ宿やとらん
冬くかし冬の
冬られを冬くかし冬の村雲に月かすくのえてうれする
東冬一句をとめて意守なん詠し時
庭行くえい
詠をひぬ身もおもふをは思すしき庭行しうへ秋かゝ夕暮
行ゝあれそし
いくよみてもうし詠川のさとふり行ゝあれそし枕かと問ふ
それとれるも

いふつゝよ杉やうてちん意んわもそれなれなもいふ人なりし
ありうこそ
あひやうありうてそ去りの月よりまありしうへせま
たりれまくさ
人うわたうれすくさ去すうたりおつ海の名紀の井よ
たそねうにりして
あひ海くかりそけりうま意んわも袖のうるとたてゆきけて
すゑさ人より
秋意ハすゑさ人よりこ白ひのよまする身に染れそひよるよ
空し海きしき
おま坂中まるよまハつれのまさ人の心そ空し海さしき
ちらうるをこりそ許よ外けり
敵ハ草よの

むかしわら殿ハ菜ものうら海つるいく歌よみぬむかしよみ京
よきそりうせる
東山やまとよりうせる山の名もさやうにてそ給ふ白き
浪しのまや
此の京おほかた塩風吹きする浪しのまやうのまや 舟人
男ハ年しそ
いふみせん身ハ年しそ年たちさ人とわれとおりやまのかな
今と卯花
うれしさの今も御代のうそれうし色にし御代のわくとうるて
うさうひしに
とかくれ海の間よ世中のうさうひとに男とやうけそん
男のいうつしよ
むかしそけのうし人彼うして世のいうつしよ花そまたん

うすくこくわかて
きしねさへうき世の色に身をなれはそめかへてまさるひもなし
ちりゆく時を
そのつらちりゆく時もなかりせはちるさくらのきえ
永正元年十二月御百首中　勅題古今集句
春河字よの　後柏原院
吹くへて春河をみてはゆくすゑもふかきよふかくうかへ
こゝろも春雨　実隆
急くそてゆくらすての花いたつ中のこゝろも春雨にぬれてつゆ
春の野にまて　政為
ちるひと消りやわかをまてみん春の野にいてゆきはと人
花そむかしの　為広
今しおもひ花そむかしのともなりは塔の青やかにむかしわすれさ
ちる花のに　宣親
きのふまて枯なきまて春のをそふくとちる花にに嵐ふくなら
ころも涙しき　政為
はなそひの浪ゆく袖に露うけてころも涙さへかれし浪
たなはたつめの　為広
詠えてはたなはたつめの手やかは岸の川さしくみたちはゆめ
萩の花ずりも　後柏原院
みかうつる萩のしら露も秋風のふるをまてよそのおもひなき
やどる月さへ　実隆
さやせ河やどる月さへ秋の夜の水まんなかに流れてそゆく
かそへさへひとつ　政為
まなつをとそへにつもりつもりよかそへさひとつきなれて今あふる

なすはつゐするる　宣親

月よのになれしゐは宮よりいくつゐも万代も
ちとせのためし　為広

さそひくるや君かことはの花のみん松はちよのなかもありとも
こひゆく人と　実隆

草むらくひゆく人をまつとまんおきさおむかにおる月影
ゆふつまるい　政為

ゆかとや中のまるいわかりして雲行ゆく人のつゆく
うつる人よ　後柏原院

見しもそのうつる人よ世ひとの露は消さぬ葉ともまて
おもひおもふに　実隆

人はさおりひせよはよや見よとこの浦たちおもうか
秋やまことと　為広

宮宮の秋みつもりやとたつるのんにみよるしのやをくまそん
たつぬもてし　宣親

おくぬもたつ見たつるをむかれよたつるのかてしよせまちるさい

永正三年後十一月御百首中勅題後撰集句

おもひそゆふかと　政為

うさゐよりせるりにとつくそわてゆくみへての雲もそそる
おきさのやけに　実隆

あたち萩の枝をさそふ嵐にさひいつる秋の夕霧
ちるのおもしや　御製 後柏原院

ゆきくてよとこるくぬおくまの花かおもしやなるの一ふし
花わてるやを　為広

まつされは花のてるやそんしそ春に見てまぬ人めなりけれ

夜ふかくなるに　雅俊

おりぬのゝさしやいへん花ちる衣のつゆしらうりとねらる

秋ふかきねの　政為

あまの川秋のさねちる夕月夜わかそてやしほるらん　為広

結ひ露むしの

露ならつりかへすけゆく秋すむし結ふ草のすゑの露けさ

冬すれ露ハ　御製

花よいくよ遊ひのおもかけ村雨よくもまつ露ハひとつひとつ　実隆

廉とらすれ

おもひある廉さらすしに山の小雲のあらしぬらん　雅俊

くさの庵ハ

いまはうきのゝ露ハ冬のもとのはるのはつよい世かさらん　政為

まつ御身と

めつらしきをなき川原とゝまるうき身とゝめやまさとらぬ

ゆめひとつの　御製

おもひくもうちかすかしかしのきみのねさりけよつゆかなひの

年ねさけさや　実隆

恋しきをおもひねさけさやたゝのまし人しては夢をみてまた

いとゞなきゆめ　政為

たゞ経るいつかゝゆる秋のよの空にはさえてさよふけ

なをいつらし　為広

人もなきをいつかりとも空ん秋さへ心のわかれねさに

いろは物し　雅俊

さむのよにいつは物うしそすかん中とるさにもおもひ

物の色あり　実隆

つくる思ひの中のおもひ袖よりおつる物の色あり

ゆきかゝる雲の　御製
さゆくよ河の雲路はるかに山本さりけり雲路さひしさ
谷のこゝろや　雅俊
むかしきく谷の戸やそれ木のこちのなみをおもひきん
むしつの御代の　為広
君をまつ人すらんと花をも御代の代のちまりて

同五年六月御百首中　勅題拾首之集句

ゑしたゝる　政為
山路ゆく谷を分けてまたうちこえてたちかへるもの花風
ふるきつゆて　宗清
消えてはまたうつるも我ひとつ風をゆかへはうつくしなく
花をそふへき　御製

とふ人のすゞしき山のとゆふしてし花のそのつ神の句ひと
めくると花の　実隆
きすゞんめくると花の宿をともあまたの山にあつくも
夏の浦をみれは　政経
ゆふあれはこの入日ますらひて秋と雲のおくれ山里
あつるたなる　宗清
あまの川浦の水ちやこの橋にふきかへる七夕
霞ゆく月の　御製
うつろふひかりも新に秋たて霞ゆく月のこよなき
やこの月を　政為
けふこゝろや秋月とみても夜半の新なるらん
かりのつかひ　実隆
とふ鳥のつ年やとつの秋の風霜さひしき秋のつかひ

こゝろのかよひの　済継

うつりかはる月の人こそまさりて春のよの月のうへそ志らさ
いかそ物かは　御製

まけそ人をつまなきかゆかん心そまの世の中はまた待
なすことの身よ　政為

よみくの身こそ神代の文にあるも今はいとかからん
いひくらさて　済継

なにとさりともおもひそめはるころやいかなるを人今こゝろん
あさそくわし　実隆

もろ人よかて思ひけさ神なる所をうとかて絶
まつれなくて　宗清

すくなにつゝる物たちく人をて似かきをとつるかはらや
ころの身てし　実隆

吹かゝしわしや松よう人かん見ゆくつ月の吉つかゝ
草のまくらに　御製

待よらかはなの涌ゝうにおりの月の夕かさ宿もつり合せん
うつろくさ月の　政為

わかけあとれのくさ月のかよふこそ於しわる春もなく志られ
松く竹との　宗清

君も臣も代ゝの錦さしやとれすん松く竹とのちるまさみつらん

句題和歌抄下

古今

たかせ川宇治の　　後西院

一秋わたりてきく川もみち神の紅葉をまつに松もかはらぬあはれく

かさみたりそ経古奉に渡るらりえへし小鶴と松とかさねて　　基煕

行きもなき宮のわりりもいほそくそゝ経よ家ひもいりとて　　通茂

ほやしもみちぬる　　弘洞

こゝのへの秋そまかせりに紐とてこし中垣よりやまちのめくれ　　兼煕

いつもの家ひとりふたりみて山ともさなきふかぬしもちるみち　　道晃

のやまにかゝる雲路にたてゝよそにみしもかへりみぬ夏の山

右　かすみにこめて　穏仁

よこ雲にうすくなりゆくいねまて霧にかゝりてわかるゝ　道晃

右　うちしくれけて　雅直

たちまちに紅葉ちりて山路への里のやとりもとをすゝん

おのつからかゝみとなりて夏野のつゆすゝしきにかゝる清

左　山をかさねて　道晃

雲きてねやにうつして君か代のめくみわかすまさりみちん

左　こゑあはぬ風　為經

けさひて露のこゝろをあらはすあやなる風かゝるみちをしてなつかしき

のゝけかそむけにてかなしきけにゆくへもいはぬよ震乃ましみ柳　通純

左　たいらひその

ふきされつるをねらひそのなくさみてましらぬ谷乃ましき露　兼然

左　なすくひその

谷さひまとおきて柳れ折るるゆくさくひその袖をむかへてまかすゝり　資慶

右　うらひをはらひて

なふとかくひとつゝらかへりて露のしらぬ宿に暮る清　實晴

あはれなとふひをはなれてちらるゝをいくちりねきのかきりを　宗光

左　おもかけかを　俊廣

たよけさら嬉しのかゝりけるよるとかはかりにつゝそひかへり　為久

右　りかつきり

まつそらにさかりてしやまよ梅か枝の末にかゝりかすとを　光雄

うちわたりかつきえぬ花ねともやまぬ人をまつの野やまも　道寛

右勝　きさしおへぬ宿の

ちりさむも清き涼しへぬ宿花をりつゝそ梅の花もたしぞ見　惟庸

右　梅花は流れ

雪ふてぬうつもまた流さそへ風のかる梅花は川花　重孝

いろかもあらしそこれ神花の中春をまさるむめの神花　通茂

持　いつまでとひめと

春の花はいつまでもひめとまとひかん流しくらまで春風　隆量

右　柳のまゆそ

ちる流り柳の中の枝を春もわるいとやまぬへあらん　長義

緑のすむやまぬまゝの柳ゆるまでもちる春の花て柳をもまたもくる

こゝもとつるやまにさ神の中そらかもの風まちけゝ花のかつみやは　光和

左　春はやまれつ

うちまもくたれの柳ちはる風の松まゆとへぬゆくへも　経光

持　かさ孫の風かさ

雪にしかまね花柳は流りのなのみうかる風それ　後西院

右　萩の露まま

霜雪りかまして人めとさまらむれおりえて中萩の焼原　広道

左　ちりをも春雨

これやまねた孫の雪花あり水ふのまそ紅まりわをも春雨　定殊

左　露うへ花まり

なこりあまる霜の中まゝにきつまで露さへとく露の人の　時量

資茂

かこちてく霰むかし路を捨て磨の人の花かりの宿

後　春乃かゝみハ　雅高

しめてある日を待やうき花とのみ見る山の春なりけれハ

拾　まつ川さく花や　季永

ちる風のまつにくらもとはまぞみてよ春の宵乃見

古　花やとも花と　芸緑

うつ路のあこ千歳よ見んやさつ花のまの露や色を見と行し月数とも

古　宵のやくそさくら　仙洞

ちらハ又こゝろやそれんかうちをこそ桜おりひくとも

後　花のそてやまて　雅章

百敷やとぬとてこやもとの人の袖おしそへて有もかな春風

為綱

おりしのわれも花をそてにやと春日の芳のすゑ見る人はとふ

後　花乃といえんとし　基熈

いまそとんてふか花のと風ぬしぬこそとこそといわかりせん

弘資

あかぬことゝむのこふ宮にいくちとせふかてぬ君か春のたもしなく

経音

古　花のとてわい　道晃

ちりなくとさそいぬ庭の風しわまたハ花のとれかと木陰やらん

古　花のとてわい　尭雅

わかるおもかけを春風さそひおくちかのとかハ志ちもしらねを

古　花をしられと　宗量

春の日をまちてさん山さくら花のところハ世のなさけかな

拾　花乃志がくは　道晃

咲かまれぬかそしられいとゝ人とまつうしのわけさく山の本のもと

身すかぬすかたやさしみん山吹川とたふ花咲くよるもなけれん

同　花のあるしや　　後西院

けふうかる花のあるしやよそにむかれかゝるなふとまゐらんすらん

同　花の雨よりに　　雅直

あすひさやられのこすりに露ぞことそかゝ花の山の春ともかん雲ハ

拾　ちりくる花をかと　　光顕

風のやまさけうれ庭のこすゑよりちりくる花とゆくうらん

拾遺　ちりつひ花れ　　道晃

あかちそぬせ花ともりもゆくふおつひ花乃雲よりかしき

同　すみれのへぶの　　隆方

飽まる花つるやゆん春の野のすみれ花の露も春をくとも

拾　とる丸山田紙　　宗顕

さかへりは花とめるもあちしめそとこすやくまく春の山田と

同　春秋のへりの　　基福

春秋とふちりても花の秋ちりかまち春かまちれ月殺しそそ出る

實業

なれしつる花かくひともおもふ今春秋のかりのちりぬかうらと

於　春乃つまりハ　　公業

こふかりのかふとおもしのきゐ春の秋のかすり八霧むひかりを

同　夏乃これとも　　為清

ねりふそよさつなれ物しやふかそ見れあてふきもかさ夜の秋よ

おしらつる春を送りてれなりからなけけるさそみる夜の秋

行豊

於　夏ハみとりの　　実種

あるあく風ハなとも花の梢夜のこゑのふ立のしくそ

のみちや袂なるまん相むつゝ夜ふ乃月ゝり風かへしこすゑを　通誠

まくらそくひ露みそら風露むしの音のそて明ゆくまゝたると

拾　なとらのくれ　嗣孝

夕霧ようつる月といつるまへてなとよ風をふの野分のそよく　宗尚

夕けく日入ぬるゆふのかけ紀の雲とか秋のあきのむらくもやけさ　相尚

このあきなかりの月にくれのかゝまつくまさかと高の山ところすみん

拾　さかる卯花　後西院

山のはの月まつさくらをはれしなれのちるやさける卯の花

古　わかゆうたちの　公信

さくらの花の色の雲のこのかせのかくれわかせのむれ月しそれ

古　おもひてよるを　公起

はなひとも花そはしむらに立つゝわかむしてよるを待やまかん

拾　月をしむ月に　実陰

夜の衣たかきをさへなけてなく入るの山や月ふちなかりし　為信

於　なかれやしおと　方長

そらふきまかせのみとりのたもと袂れはけしきおらぬうかく

わかくにわしやともきてそむしくみと雲ある秋のそのゆく

古　ころかゆめられよ　通村

いかし〜ほ花そらへふるまらし夜もいつふゆかしわれの月かて　俊成

於　舟ちをしれなし　雅喬

まれへゆとらかたち花の雨すれくなきの涼さはよの手枕

ときはなるみな月かけて山川のそこにもあきはたちくるなみの

秋

夜もすゞしき　季通

ゆく人やのなかの清水かげとめてよるのころもにしばしやすらふ

後

なつもしらるれ　隆業

こゝろをもむすびてすぐるながれにもよるはすゞしきあきのかぜかな

古

さて夏乃花　言行

夏秋のゆきかふほどのゆふぐれにすゞしきかぜやかよふ川なみ

後

よるもすゞしき　道晃

あさぢふやまだきにすゞしよるのまにいつしかあきのかぜぞふくなる　光雄

河かぜもあけゆくほどのよはなれやひとりねさむみ袖ぞつゆけき

古

夜ぞつめたき　泰時

たもとよりおきてすゞしきよるかぜにまたかたしきのゆめもむすばず

後

風のすゞしく　輔通

たちいでゝわがかどにふく風のまのすゞしくなるもあはれなりけり　実光

さわがしき夏をわすれてよるのまの月もすゞしくなりにけるかな　宗條

ひとの袖もかへしてあかぬ風のすゞしくかよふゆふぐれのそら

古

河辺涼しき　雅直

あまのかはなみのうへにもすゞしさはまさるらむいまよりあきのかぜ

古

[illegible]　基定

[illegible]

後

夏もくれぬれ　実起

ゆく川のながれもあきの涼しさにこゝろもすみてくるゝ夏かな　経慶

きのふハ人をこふてかはらぬなかにまかせて渡りのかたの中よ　淳房

天つ風もかはらぬ川の中津瀬にとまりもするか神の涼しさ　基熙

後　天川わたらせしせを

妹がそへをもこそ秋風にとすれとかさねる萩いろの錦のよ　資慶

萩の葉に袖かはらせしてむすひ天の川中の流れをわたる人の夕露　経慶

古　わたる川風

きそのかたに秋かぜのたえぬ風ゆふくれに契てまつ夜の萩原　尭然

後　秋乃七日後

かりそめに秋乃わかれの夜を七夕にかへて川の瀬に契るらしきを　通茂

萩をやまつ川秋の水ぬきかはるの川わたりのゆくせをかけて

織女のわかれのかねのおとくらすたへてせよかりもよりやまさしかれ　時方

秋　わかるゝたなはた

いく秋やわかるゝたなはたのよにもまれなるかけの契りかはらで　弘資

古　たなはたのめの

とるかしや秋の一夜を契りやなく七夕のあふせのひとつなる　後西院

秋　萩乃葉かせ

ふるさとに萩咲かせるに風かよふ袖にあたらしと　国久

後　秋のすゝき

男小野のしもおりぬらし秋のすゝきかなしきおもひたる　後水尾院

後　まつをとるかな

たえぬとも思ひつゝまつの花乃そてにかはる萩かそ　信方

公晴

ゆく秋をおしむまもなく暮の空にきえ行く荻の葉末によ

古　なかくおもしろき　道晃

これやこのしらぬなからんなかく涙の露の秋の色ハ

投　旅人のわすれぬハ　雅光

よひく小月をそやれ人のかて露の袖の旅人の涙ハ

投　袖をかくるの　頼孝

秋かせの声をかくも聞はしらぬ松の夜寒をとふらむ

定基

どかそ袖ぬれおもひの露涙袖をしほれ声やかく虫の秋風のしぐれを

於　をく露むしの　雅高

さよふけて袖にみつ旅人の秋風やさそふ虫の音を思ふらん

古　松むしの声よ　有継

あはれ身のさ山のつまとふ鹿の秋色もかなしのことそしる

古　萩のたくこ葉も　嗣孝

露むすぶ萩が花をもしのひつつ月もうらめしき秋のさひしさ

投　簾たれこめて　重條

とへかし荻簾をもちなれし山さとのわかれを嫌ふる秋のゆふへの

季賢

世をうしとたえしかみの田のいほりて小簾をかかけもとむる旅人の宿

投　実守

おもひわび簾のうちの秋の野にさそはれてさひしき花にわかるる

投　おもふ人の簾ハ　資清

われてしはおもふ人の簾をかかけてもすみわたる月とさそひわかるる

拾　いろかき露ハ　永慶

ゆくすゑの露にさそはれ花の色にさそはれ秋の夕くれ

拾　わかつき露す　道晃

よひの間はかこち侘ぬくもれてわかるゝ宿よやまたも月かな

後　月のくまなき　時成

さえゆる月の入かたおちて空にのこれるかりの一すち　弘資

後　題しらず　道晃

嶺吹そしむ嶺の松をとゝめてひと夜の月にすみわたる風

まちいてゝみる月さへすくるまにひとりねぬるよの影と見えつゝ　後西院

風寒けは中々に月をまちえてきえぬかたりを思ひねの床

拾　てる月かきの　長時

いく秋のなかめ月をとのみもあはれしてまつにかはらぬ

後　月とわかれと　隆長

さやかなる月とわかれとおしかれは秋のむかしそしのひかねつる

後　かりの行月の　竟然

雲晴てかゝる光にかはるゝよ月の影のこゝりをかりそめん

於　月をうきよの　通茂

ひとりのみ秋のかたみと月に見えいてんやまた

のゝ宮こてらすやとの月かけにそゝかへるらん

於　こゝろのやとに月と　後西院

わかれかとはかりかりやとの月にさらしらん我にかへるらん

後　有明の月と　弘資

かすみわたるやそのをの月かけはくれなゐの花を思ひやらん

後　まちの月の　嗣芳

かすみわたる嶺の月にかゝる雲のみち秋の空

古　景忠

とみち宿よりとはにきのそのうへしあけの月に影をも見えよ

古　秋かけり待そて　資行

ちるとみえていろはかはらぬ風なれて袖にかゝる露そ宿に波ゆる

右　なきゆく鴈の　資時

それとしもすゝそれぬ霧ならた鳴ゆく鴈の数をそ見して　常範

ゆふ晴秋のまくれたつくらふゆふかすみゆく雁のかすにみえなかゝる

左　女川秋霧に　永房

山のはにかゝる川秋きりいとふくもかゝしきあたりを流れて

公澄

霧のたえまわきまへのこと山梅く立秋きりハ夜をかくしける

右　霧立のり　公純

おきつれ霧にたちわけくもゝさかの声ゆくりてそれ江のさゝ

右　かさゝの菊に　道晃

すみなりつさる絲の菊にそしくらきぬれるの秋のさとに紅そさかりよ

文にくもうお絲のさくへのむつくなきへかれかけてこれし

菊のさるよ　桐甫

を霜をわけ染られて咲ものそくさへけにかけよ秋風

季定

ひとつぬかりらの

あらわせよわかぬをそられちるまくもおもふ花さくよその流

後西院

ちるの絲くわかぬさもなみぬをかきりさやさん秋の川波

雅季

袖をかのみちの色をも

くれなゐの袖の紅葉とむら川ふかくなれも流れ葉の川波を

実業

左　紅葉のゆふさ

そめてぬめのへうの風のかくそかへしわせて鐵の山ゆるの岸

資冬

紅葉をさまけて

後水尾院

あはれとも見る人もなき山かけにいろこそちいりそめぬらん
色ゆく秋や
ほとゝきすなく秋やおしまれん紅葉の色そまたふかくなる
為源
いはしろもすゑ行秋やとなりのもみちのちりはてんかたなき
基長
秋めてもすゝきかれはもしもかれしか山さしかゝる梓弓の
秋の夕は
通茂
夕暮はうさもわすれて神の歌にそむるとも秋のもみちを
輔実
右
あはれをまつ秋
雲にほふそらにもみちのちりそめてあはれそ秋の山めくりする
後宸
宇治山の秋はまつのあさきもみちの山の風とちくゆく
ちくれくて
道晃
ちらぬまにいてゝみむすとも紅葉ゝの枝のうらかし
木のしたかけ
雅直
宮ゐかりしそめし松の色しらすすへの紅葉なるもとせにかさねてよ
野辺ゆく袖ゝの
公親
秋の色を夜ふかく帰りくる嵐ゆゑに知らん袖さひしさ
とく袖哉
隆量
宇治の秋色をとく袖色を袖にちる紅葉を見るもさそふお
ちりしひの色
光雄
年をへて今ひの暮はてゝかゝるさゝなへのくもり
袖のうへかり
資行
行くまつる紅葉の秋の嵐のゆかりて袖の上にちりしむすめしみそめん
さしさかりもの
有瀧

冬ふかき嶺のあらしの山さへしけきこの松乃雪もうつりて
季通

くれ竹の夜をはわかしつもれるも空にきえぬ雪もありけり
公央

竹のかうりもをとにきこえすむさ鶴乃雪そ消さえぬ
右
すむひとしるの
兼仍

われゆゑとつらき岩乃ふ扉よそてすむひとしる花つゐてつまもね
尚長

まのうこほりやまつ流れてすむそしる乃竹のさけさ
左
なきこし
道晃

ひさしきの霜くも霜のわすれまるもまさし宿の鶴かを

竹の風ふきさの結宿にも寄る山人のなきさしわすれこの見
資忠

松
わすれゆりしをを
雅高

みちのれを霧の玉ちるいろのみしわすれ深け野への乃しをを
通躬

はなそてたわらま嶋りしをかるあまもそれとゝろいわねは小笹に
松
宿ふわれしそ
時方

霧しわきのれ野の末風それのわまて宿の花そそ岩ぬるね
基時

武蔵野の人すかき夜風のつらをわすれや宿の第そそ見しまうひぬら
雅豊

まれつひまもの竹かり枕のまに宿の秋そ花みしし竹ふ
仮
宿ふまゝしゝて
伍綱

志のゝ人の山の雪まるもて春くしまさへ引き宿深まりゝて
永貞

むれゐてはそれとも見えす○色の雪にまかひてたてる白鷺
古 雪ふりしきて　資茂

くれ竹の一夜のほとにふしなから雪をもりしく人のめくみに
於 雪とたのまし　通茂

枝よわき雪の下折にしたかひてむくふみ(?)の巣もさ
ほ あさけのこゑの　後西院

あさ風の吹きそふそ(?)みねの山かせにたえす雪のふりしき
まとゐつもれるみねの山かけの松にかかりてたえぬ白雪　宗光

雪ふかみ大和ことのはしけきみちをたつね入る人のあと
わかれてはさらに雪のなかにそとのたちも(?)　公規
としふれはま(?)　時成

雪の色も同しみちにふみわけて山もとはかりそいそかれける

冬のくれ秋よりもさむくなるらんとしかはりぬるよさ　通誠
古 実陰

志らそてのおもかけは雪のうちにしもあらはれつつ人の道なさ
ほとなくたえぬる今朝のしら雪にあとをつけつつ人とはしけさ　通躬
をしみやまかめる　定淳

いつまでかいてて月日をすくしつつかかる雪の夜の言葉さそ
春の雪にかかりつ　資堯

さむき夜を袖にかさねてくれ竹の一夜のうちにつもるらん
ほとふりの　綱平

いくたひもかへりみるらんむすひつるくものはかなきかなしみの　光雄

さくらいとなきこの袖ふかぬれなくらむちひの宮やこゆらん
資廉

ことゝひおつるなるともやくしつむおもむれ契りなりし紀
思ふなこし枕
弘資

いたづらに夢の今またにさるれしと思ふらぬ枕もてなおやすさ
こぬ人ゆゑに
雅喬

こゝろやすくとなりの宿へそてこぬ人にさるおもひかまちひと
古
うつゝに見し人かり
雅房

あはなるやつれなき人をまつ夢にかも袖さへ人をならひつゝ
待つる夜の
実維

まつのはかなくなるとも我ならひてもしひおでも人のとへかし
実種

たのめつゝまちつくる夜さへ思ひそへてあまやく人のなりしさん上

今日よりの
実昭

逢はれてたゞ我こそきしぬ契りとそて今ぞつれなくめぐりの火なれや
忘しきせ枕
具家

後はまつのいり世をたえていつも忘れしきせ枕ぞ袖ぬれまさりけ
雅光

うきめこそまつなれてなかし川ひきせすそ方は思ひ初め
思ひて忘しさ
通福

いまさら人まちまかせれはわやかに思ひて寝覚の人のおもかけ
輝光

いまは思ひて見しまゝなりつてわかれつる人の面影
いとゝうき面
実起

つまなしと人やきかん我ならばいとまなき袖にちる老
宣定

かくとめられし後の世のゆくゑもりもてぬはいかなる無跡なる人

ちかきちかきしらさ　實業

したかへとらへ　ろうきそしみゆ申にもちらす月のめくる　康資

契りをそさて何いつはりにちりはてん人と何思ふらん

いつか契りし　澄典

それのせにいかにたかひし中なれはうきかはらて今もそのかし

男をそうらむる　昌純

とにかくに男を恨むるそうき世中への行よつゝ音にても

雅豊

いかにさて男をそうらむ恋ひとてもいけるかりそめ人のつらさと

筆もてしたゝね　経光

ゆりとめし世にわかれいまもしかれは筆もてしたゝね今そつらさそ

おりへたくらし　道晃

はかなくもおもひいくらしきにくらう契りかさねしもれなかのちの中は

いひいかにちきるそ　通茂

なくさみの身をかへりにわかしともいひおかれそれたるらん

わらそやなゆる　資堯

わきの川瀬をつる浦の中をしたにうらそやかうらみやわたる

おりひやさしは　道晃

ちるまもなきひかもいはておもひそれはかれそれさくのこゝろそふきし

いつかの御中と　通茂

いはぬ秋の夜はふけてとふ言の葉をかへしつゝるにふみ契りかさりせは

わかれゆく秋の　資堯

新しくひとかけいわれのかけしはにすつる月のとふかかさらん

うれはよつきてい　通茂

みしかよもまつのゆふへをたのみにてしらぬかきりの恨みてそみる
急に思ふこの 通純
袖のうへにしたしきかきりの物おもひとはかなくこれまてあはれなる
あはれなる事さや 資誉
こゝろにはあはねかけきやなくさめん後のちきりのそてまてさへ
なからへはそれを 俊京
秋そへる契りもうつりとおもひきん夢のうきもつらさ
今宵ねとふるとも 定輔
さきのとにたのみのこともかさりわりて今宵まてのち契りの行末
あはてそ得る 長義
逢ふしさにおもひそはなそいとゝ此夜はわりおもひ数多なる心はつらさ
袖ぬるをおもひそめて夕にそむまた恋をちるよひとたる人のつらさ
具起

思ひつるわしらまし 覚然
あひみしは夢かとおもひよりてこの世のうさのかきりをしらまし
なからへてその 教康
よのなかにまたしらぬ人をのみまつよそにもとへる人のかなしき
なのかさねて 通茂
またしらぬちきりのこのうさの袖のあはれをもかきねにそとはる
忍ふよりよる 雅章
ちきりてもなれぬ袖のあはれとはさらにかなしきよをそたのまん
なかはてまつ 通誠
一夜ふるなかにしはしのちきりわすれやつらき人にもわかれそはつ
あひおもふ人の 時量
まてよりほんとのよひやなとり恋わひおもふ人の中にやつれは
ゆめそつらきん 俊清

はるの夜ゆきてうらむ人はくにとひかへりをさゝぬ入ぬれば

岱規

今はとてわかれてうらみんつひの身のまたたのむあらん

まぼろしはせぬぞよ

秀信

ゆめぞとはしれかしいまよりしほれてまちし人の面影

わすられぬを

竹豊

ちらしおきて行末も君は誰さだめしそなたの遠さかる

兼實

むさしのゝ草のゆかりに見る人にものいとふるさとにて人

尾上の小松

通琳

をのへ山あらしのまへのこのまよりみえてはるかにかげをともしつるわ

雅直

ゆふべのおもひは尾上の小松君が代のながき影をぞやどすかな

右 秋の山の

道晃

くもそしれ秋の山の谷川のすむかのみなるゝとを浮きと

左 むさしをきしを

尭晃

ゆるさずもゆめにみえて人をあき秋のゆふべにのはるゝ

左 谷のしらくや

仙洞

紅葉ちる宮の姿こそなれたゞく谷のしらみやいかなゆふ

右 谷のむもれ木

桐賓

山川のうきしづみして谷の戸にやもれよくらん

右 谷のむもれ木

道晃

いはのせにをとをたてむ花さくぬ身にむもれ谷に埋もれ木

右 むかしをきしを

尭晃

そこの紫をしをきつゝやまうれ里と経さ難きてみ家のすゝ

左 汀のかゝり

花量

たれかれとやみさへのかけぬるのかしこにほのくらしるこぬらもきさ

左　浦さ木雨のうへ　隆豊

君か代の千とせの数て松かえ深きさ去らぬつもりの人すらん

ちりとも鳴なる　実種

うき風も雨つもり鳴なるわれ清の気をまよりなかの波やとらん

永貞

しるこうし闘の乃かなむなかしこう嵐やいりさむきさ　実積

影みなる松とちと世のあとてやものかたにかくれ闘のかなる

ゆかのあらへ　将孝

右　あらむとゆ床をるとの子清の錦の露そ路の上其代よ

さちひゆく人の　宗縁

ゆりつゆる家とまけつきみと文とひゆく人の袖やさむきさ

とりかゝそこひゆく人のこゝろかもわかとやこえけそこしよみらん　基勝

右　家ひゆく人と　経覚

あゆみ絶えひゆく人とおりひゆるきしも山路暗きや浦をらと　通福

家路とはひゆく人とせもあ夜は夜もあさ世のゆくくとぞしれ

右　なふかれの　宗量

ひとこはたかふるるまのうさもわん夢に夢の路よくるも

えやこけせるゑ　豊長

すゝかまてしやこ宿る子ひよおく露さ清ひよ路きる紅も

清さの玉手　雅高

宿のうちよわりて露のとひにおき夜文ゆくほさの玉水

夢のうちしの　永徴

はしたなく身にしむ風のゆくゑかなわれは都の月のかけまつ

左　うへしあきの　道晃

ふたりして見し人の後のわかれてもよそにへたつる月のかけかな　經營

左　わかれゆく　道晃

はるかなる山路の月にわかれてはかりねの袖やなみたなるらん　季賢

ほとゝきすの声のあはれは塩のみつ　季信

あはれなり涙にぬれて我身をもしとなみの　經尚

右　ながむる人の

いつゆくへもしらぬ人のおもかけをわかれの秋風さそふ夜半かな

右　うさ○を待ちし　季信

さそへてわかれの中にいつさ○を待ちし山の奥にも

右　霞の…　仙洞

なかさひしき中の秋の夜をまつのもとにねぬ夜の月をそまつ

秋のひさしき月日のふかきとへておもひつゝそまつ　岩光

右　ちき…の　道寛

ゆくへしらぬ人のかけをもなかめつゝ月の光のさひしさにも

身にしむ風の　公規

あさゆふにおもひしとおもふをたにしらぬ袖のなみたかな

とふ人のあはれを　基熙

すゑをてもこゝろにかけて袖にむすひつゝわかれをまつて

わかるゝまて　經營

そのまゝあや世につかさへちうる花の色うしこ千とせよろうてころらに
ちよろゝ世とも　　雅直

あつめて四方さ世とゝつらしあまた紫雲の紐とくこめに

右

何とねまるの　　通村

咲花は風のみちの名とわまゝや何とぬまるの梢のうへに

三世の仏　　奥起

おりへて三世の佛をにてつるさしあつと法をなんやをわき

右

萬代のとしと　　道晃

あきまれる萬代のとしめ露へ見るゆりかゝ紫乃めしこまき

とつやか萬代のとも萬紀よありてこゝろ紀松八尤ろやと　　貞光

寸多の世まそれ　　資茂

そのりかたけれるたといや法もにす多乃世まそ萬へこゝかしまそ

ちゝ世のうき　　弘資

いおりとをそわりとかの萬代の数よまるる八百万代と君かまるせん

むしつるの法代乃　　郷永

いそのその山里の法世れたちしを君をおさしめる君とされるわかぬ

よ何ひかれみての寸か露るりしわりしや君のへしん　　雅章

いかへの山里の法代かをそとへめへぬ君の乃のすくしき　　実業

享保酉年

三月吉日